IV.　恋愛歌

VI. 恋愛歌

恋愛歌の成立

19 世紀末に記録されたロドピ地方の婚姻儀礼の記録には、ロドピ方言でいうところの галене、つまり「可愛がり」から始まるものが多く見受けられる [1]。記録者の多くは、たとえばペトコヴォ村の記録を残したポップコンスタンティノフ Хр. Попконстантинов（1858-1899）のように、地元に生まれ、地元の学校で教育を受け、若くして地元の学校で教師をつとめるかたわら民俗誌を残した在野の人物であった。そのため、地元の人びとの意識や慣行を、外からの枠組みにとらわれずに描き出している点に特徴がある。彼らロドピの住民にとって、結婚とは「可愛がり」から始まるものであり、結婚への第一歩であり、婚姻の重要な一部をなしていた。

1889 年にイヴァン・シシマノフ Ив. Шишманов は、自らが創刊した『民衆口承文芸、科学、文字文化集 Сборник за народно умотворения, наука и книжнина』(以下 СбНУ と略称) のなかで「我々の民族誌学の意義と課題 Значението и задачата на нашата етнография」と題する巻頭論文を著し、民衆歌謡の重要なジャンルを「英雄、歴史、伝説、儀礼、哀歌、宗教」として、まずもってこれらの採録をすすめるようにと助言した [2]。СбНУ の実際のページ構成では、これらの項目をさらにまとめて「季節・宗教」、「個人」、「家族」、「社会」、「政治」の 5 つに分類し、以降四半世紀、今日のいわゆる「恋愛歌」は、濃淡の差はあれ、この 5 つの部門に分散されて収録されることになる。ここからうかがい知ることができるように、彼にあっても「恋愛歌」は独自の分野をなすものではなく、さまざまな儀礼に付随するものと捉えられていた。

しかし、1915 年発行の СбНУ 通巻第 31 号にクラスチョ・ストイチェフ Кр. С. Стойчев が「テテヴェン方言」を発表し、付属の方言資料の民衆歌謡集のなかで、「愛の暮らしから Из любовния живот」とする項目を立てて、СбНУ では初めて「恋愛詩」が独自のジャンルとして取り上げられる。以降、1923 年第 35 号、1926 年第 36 号など、民衆歌謡の特集号では、メインかサブのテーマの扱いの差こそあれ、「恋愛詩 любовни песни」の項目立てが一般化してゆく [3]。

このように、第 1 次大戦前後の頃から「恋」がしきりに取りざたされ、「恋愛」という概念が広く人口に膾炙されるようになったのは、どのような理由があったのだろうか。また、そもそもこの「恋愛」という概念は何を意味していたのだろう。

19 世紀の後半から 20 世紀初頭にかけて民衆歌謡の採集が進められてくると、その形式、題材、形象

を素材にして新たな創作に取り組む作家や詩人たちが現れた。もちろん、彼ら以前にも、オスマン帝国からの独立運動の時代に、ペトコ・スラヴェイコフ Петко Славейков (1827-1895) やフリスト・ボテフ Хр. Ботев (1848-1876) のように民衆歌謡の形式を用いて創作した詩人もいた。しかし、彼らは、フォークロアからインスピレーションや形象を汲み取りはしたが、民族や独立といった新しい時代の理念を追究し、それを表すためにフォークロアを用いたのであって、それらの理念にそぐわないところでは、あっさりとフォークロアの王国を離れたのである[4]。

1878 年にオスマン帝国から独立を達成し、軍事的・政治的混乱から一段落したブルガリアは、ヨーロッパを志向して本格的に歩みだし、文学の分野でも西欧やロシアの最新の潮流が堰を切って流入し始めた。新しい世代の知識人たちは、旧世代のように「独立」や「民族」といったスローガンのもとにその目的にかなうものだけを熱狂的に、かつ選択的に受け止めるだけでは済まされなくなっていた。ペンチョ・スラヴェイコフ Пенчо Славейков (1866-1912) やペトコ・トドロフ Петко Тодоров (1879-1916) のように、新生国家で基礎教育を受けてヨーロッパに留学した知的エリートの若者は、自己をヨーロッパの一員として意識するようになってはいたが、彼らの戻ってきたブルガリアとの落差は大きかった。オスマン帝国からの独立によってトルコ人やギリシア人が去って行った後のソフィアは、1880 年には約 2 万人、20 世紀初頭には人口が急激に増加したとはいえ 6、7 万の小都市にすぎず、サロンや文学サークルはまだ芽吹いたばかりで、都市文化やそれを育てる社会的土壌も貧弱であった。身につけたヨーロッパ的教養と、現実に暮らすブルガリアとの間に大きな溝がたちはだかっていた。その溝に苦しみ、ブルガリアと西欧を結ぶ架け橋を模索し続けたのがこの世代であった。

ペンチョ・スラヴェイコフは、「世界的な文化の最上のものを享受できるまでにブルガリア国民を高めることを生涯の使命とみなしていた」といわれる。彼は、「同時に、民族的な伝統のかけがえのなさをも強調し、このような理由から、同時代のロシアと、特にドイツの文化の動向を熱心に追いかけるかたわら、自らの詩に自前の民族的モチーフをふんだんに用いた」[5] のである。換言するなら、彼は、ブルガリア人としての民族のあり方とヨーロッパ文化との連続性を民衆歌謡に求め、それを生涯のテーマとしたのである。

その意味で、1901 年に発表された「民衆恋愛歌謡 Народните любовни песни」[6] と題する論文は注目に値する。彼は、愛を「神々しい狂気」と定義し、ブルガリアの民衆歌謡で歌われる恋愛詩のテーマを、出会いと憧れ、愛の試練、愛の完成としての死の称揚を特に取り上げて、これを宮廷風恋愛に由来する、結婚とは独立した西欧流の恋愛観念[7] に基づいて解釈しなおし、ブルガリアの民衆歌謡が西欧の文化的土壌に連なるものであることを示そうと試みる。その一方で、彼は、民衆歌謡の分析によって「根底にあるはずの特徴を目に見えるように抽出して、･･･、今後の展開においてそれを豊かにし、ヨーロ

ッパのすべての民族で達成されたように、それをもって我らが民族の天分の優れた特質の発現者たらしめるのである。バーンズ、ゲーテ、ハイネ、ベランジェ、ペテーフィといった真の歌い手は、もし彼らが自らの歌のなかで祖国の民族的な精神を明らかにしなかったなら、後の世代が与えているような高い賛辞には値しなっただろう。詩の分野において、この花が私たちの土地の生気に養われて育ち大きくなるように世話をするなら、そのときに始めて私たちは世界にむけて何らかのものを引き出し指し示すことができるのだと期待しうるのである」[8]と記す。

このように読み直された民衆恋愛歌謡が、若い知識層に広く受け入れられたことは想像に難くない。しかし、それは、ペンチョ・スラヴェイコフが構想していたような民族理念と民衆歌謡が結びついた形でのヨーロッパのロマン派的思潮に連なる「恋愛歌」として発展したのではなく、「恋愛」の観念だけが独立して、一つは現在のポップ・フォークにつながる「恋の俗謡」に、もう一つは、リリエフやバグリャナの詩に見られるように、民衆歌謡にテーマや素材を得てこれをさらに洗練・彫琢して観想的、思弁的な「恋愛詩」の世界を作り上げる方向に向かった。

その一方で、ノーベル文学賞にノミネートされながら、独身のままイタリアのコモ湖畔で愛人に看取られながら没したペスラヴェイコフ、ペトコ・トドロフの妹のミナを愛しながらも彼女の両親に反対されて結婚できず、パリで客死したミナを見取り、ミナの没後ソフィアの随一の美女と歌われたローラ・カラヴェロヴァの求愛を受けて結婚したが、嫉妬のあまり自殺したローラの跡を追うように自殺したヤヴォロフなど、この世代の詩人や作家たちの女性関係は、恋愛を通して生み出された近代的な自我とブルガリアの現実との相克であったが、スキャンダラスな事件の形をとったために、若い知識層の範囲を超えて、若い世代全体へ新しい恋愛観を世俗的な現象として波及させる力を持った[9]。

このようにして「恋愛詩」という用語の一般化して行く 20 世紀初頭のこの時代は、上記のような事件に批判的なまなざしを向けていた常民の暮らすブルガリア社会でも、婚姻儀礼が徐々に変質し、共同体の行事から家族行事へと変化してゆく時代でもあった。通常 1 週間続いた結婚式は少しずつ短くなり、親たちは自分たちの都合だけでなく、当人たちの意向を確かめるようになってきた。儀礼の場で歌われなくなった歌は、求婚歌としての本来の役割を捨て、いわば切り売りされる形でホローやセデャンカといった若者たちの娯楽の場に新たな安住の地を見いだし、結婚式とは離れた独自の領域で必ずしも結婚を前提としない恋愛の歌として歌われるようになっていた。アルナウドフ Михаил Арнаудов (1878-1978)[10]やストイン Васил Стоин (1880-1938) といった、ヤヴォロフとトドロフの同世代の民衆歌謡の採録・研究者は、このような変化を敏感に察知し、後に発表する民衆歌謡集や研究のなかで民衆歌謡における恋愛詩というジャンルを定着させていったのである。

恋愛歌の項目

1915年にストイチェフ Кр. Стойчев が「テテヴェン方言 Тетевенски говор」に付属方言資料として СбНУ, кн. 31 に発表した民衆歌謡のなかで「愛の暮らしから Из любовния живот」という項目を立て、СбНУ では初めて「恋愛詩」が独自のジャンルとして取り上げられたことは、先に触れたが、彼はこの「恋愛詩 любовни песни」をさらに 11 の下位項目に区分している。その 11 の下位区分は次の通りである。

1.	Накити, моминство, либене, закачки	アクセサリー、娘時代、愛すること、いちゃつき
2.	Момент на залибене	愛の始まる時
3.	Взаимна любов	相思相愛
4.	Родителски егоизъм	親のエゴイズム
5.	Пренебрегната любов	無視された愛
6.	Любов по сметка	打算の愛
7.	Разлибване и разгодяване	愛の終りと破談
8.	Пристанка	駆け落ち
9.	Отвличане	嫁盗み
10.	Тъга за любов	愛の苦しみ
11.	Из съпружеския живот	夫婦生活から

ここには、婚姻儀礼歌は含まれていないが、現在では家族・世態歌謡 семейно-битови песни に分類される項目も多く含まれている。「愛の暮らしから」とは言い条、出会いから、結婚をめぐる両親との軋轢・葛藤、夫婦生活を営むまでのさまざまな局面を取り上げた分類がなされていて、結婚が暗黙の前提となっていることがうかがわれる。

しかし、1934年に СбНУ, кн. 34 に発表されたヴァシル・ストイン Васил Стоин 編「ロドピ歌謡集 Родописки песни」では、第5章「儀礼歌」に「婚約儀礼歌」と「婚姻儀礼歌」が下位項目として立てられて、第8章「日常、両親・夫婦関係の歌」に家族関係を歌った歌の下位項目と並んで、「結婚の願い：婚約、結婚式」と「うまく行かなかった結婚」が別項目として立てられている。そして、第9章「恋愛歌」では、以下の10の下位項目が立てられている。

а.	Любовни срещи	愛の出会い
б.	Желани любовни срещни	心待ちの逢引
в.	Прочути моми и момци	評判の娘と若者
г.	Задиряния и наддумвания	いちゃつきと口達者
д.	Подаръци и поръчение	お土産とおねだり
е.	Любовни желания	愛の望み
ж.	Магии за любов	恋愛魔術
з.	Вярна любов	誠実な愛
и.	Любовна тъга	愛の苦しみ
к.	Нещастна любов	不幸な愛

先の項目と比較してみると一目瞭然のことに、ここには結婚や夫婦生活といった側面はすべて捨て去られ、「恋の俗謡」を思わせる項目立てがなされている。以降、特にロドピ民衆歌謡集は、採録された歌の数と質と内容を考慮して編者の考えを加えながら微調整をしつつも、基本はこの項目立てを継承し発展させたものが用いられている[11]。

私たちの採録した「恋愛歌」にも、元来「婚姻儀礼歌」に組み込まれていたと思われる歌も数多くある。民衆歌謡の伝統に従った項目立てをするとするなら、それらを「婚姻儀礼歌」の枠にもどした章立てをして、その枠組みのなかで歌の位置づけをし直して再構成する編纂方法が、本来の姿により近づくという意味では一つの理想ではあるであろう。しかし、そのような作業を支えるだけの一次資料はまだ不十分であり、さらに、これらの歌の歌われる場も変わり、歌い手自身にもその意識が徐々に薄れつつある。そのような状況のなかでかつての「婚姻儀礼歌」にも新しい意味が付与されて歌い継がれていることを考慮して、本書でも、СбНУ, кн. 34 同様に「恋愛歌」の項目を立て、これまでに刊行された民衆歌謡集を参考にしながら、採録歌にみあう下位項目を設定することにした。

---

1. СбНУ, кн. 9, 30-34. 「可愛がり」については、Момчиловци, стр. 597-598 および IV-B-1 歌の註解を参照。
2. СбНУ, кн. 1, 31.
3. これ以前にも、ミラデノフ兄弟 Братя Миладиновци が『ブルガリア民衆歌謡集 Български народни песни』(1861 年ザグレブ) で「恋愛」を独自の項目に分類したが、民衆歌謡全体を見渡した体系的な項目にはなっていない。
4. Петър Динеков, 'Фолклор и литература' в Христоматия по българска фолклористика, Университетско издателство "Климент Охридски", стр. 185.

5. Chareles A. Moser, A History of Bulgarian Literature 865-1944, Mouton, The Hague · Paris, 1972, pp. 129-130.

6. この論文は、科学アカデミーの前身であるブルガリア文芸協会 Българското книжовно дружество の機関誌『定期雑誌 Периодическо списание』第 62 号、1901 年 第 1 分冊に巻頭論文として発表された。

7. 西欧風な恋愛概念の成立と展開については、アンドレアス・カペルラヌス著、ジョン・ジェイ・パリ編、野島秀勝訳、『宮廷風恋愛の技術』、1990 年、法政大学出版局およびドニ・ド・ルージュモン著、鈴木建郎・川村克己訳、『愛について』、平凡社ライブラリーを参照。さらに、阿部謹也、『ヨーロッパを見る視角』、「第三講　恋愛の成立と新しい男女関係」、岩波現代文庫、2006 年、135-210 頁参照。

8. Периодическо списание, кн. 62, год. 1901, стр. 1-2.

9. この点で、北村透谷の場合と多くの点で類似が認められる。明治 25 年（1892 年）に若干 23 歳で発表された「厭世詩家と女性」と題する論文、彼と石坂ミナとの恋愛関係、25 歳で自殺という彼の人生行路は、明治期日本の青年知識層に大きな影響を及ぼした。後に島崎藤村は、透谷のこの論文を読んだときの強烈な印象を『桜の実の熟する時』に記している。透谷は、また自由民権運動にも関与したが、彼の関心のあり方は、「ヨオロッパ列強の力にたいして、同じ原理の力によって対抗しようとするものとは違って」おり、「壮士的慷慨を核とする国権意識についに透谷はなじむことができなかった」（桶谷秀昭、「北村透谷小伝」、北村透谷『人生に相渉るとは何の謂ぞ』、旺文社文庫、1979 年、395-396 頁）といわれる。ヤヴォロフも当時まだオスマン帝国の領内にあったマケドニアの独立運動に関心を抱き、なんどかパルチザン運動に参加しているが、事態が政治的、外交的、軍事的に進展してゆくにしたがって関心を失ってゆく。

10. アルナウドフは、СбНУ, кн. 27, 1913 に発表した Фолклор от Еленско の解説でこのエレナ地方の民衆恋愛歌謡について論じている。ちなみに、彼はヤヴォロフの友人でもあり、後に浩瀚なヤヴォロフ論 Яворов, личност, творчество, съдба, София, 1961 を著した。

11. 新しいところでは、НПСР（1973）と Вулджев（2002）がこの方式を受け継いでいる。

A. 恋への憧れ

ロドピ地方だけでなく、一般にブルガリアの若者にとって、かつて、結婚するしないは問題にならなかった。結婚するのは当たり前で、社会通念となっていたのである。彼らの関心は誰と結婚するかにあり、特に娘たちの場合は、それが彼女たちの短い青春時代のもっとも重要な問題であった。

まだ特定の相手のいない娘たちは、洗礼者ヨハネの日（6 月 24 日）の前日に指輪など何か自分の印になるものをつけて結んだ花束を持って集まる。皆が水をはった大きななべにこれを入れると、2 人の娘が一言も口をきかずにこのなべを菜園のバラの花の下に持っていって置いてくる。翌朝、娘たちはまだ日の上がらないうちから広い野原にやってくる。なべが運び込まれると、口達者な娘が、なべのそばに座りこむ。そこで、なべにかけられた覆いの下に手を入れて花束をつかみ、これを引き出す直前に、ぐるりと取り囲んだ娘たちに向かって、「この花束の持ち主は、イヴァンと結婚するわ」とか、「羊飼いをお婿さんにするはずよ」などと言って婿占いをした [1]。このような習わしは、ロドピ地方でキリスト教徒、ムスリムを問わず広く見られた。また、ダヴィドコヴォやペトコヴォでは、娘たちは、聖ヨハネの日の前日の晩に他所の家に泊まりに行って、枕の下に自分の指輪を入れておき、その夜夢に見た若者と結婚することになる、と信じられていた [2]。

娘たちがこのように将来の配偶者を知ろうと熱心になったのは、配偶者の選択が自由でなく、両親など他者の意見に大きく左右されていたためでもあった。恋への憧れの歌の歌い手が多くは娘であり、歌われる主人公が娘であるのも、そこに理由がある。

それに比べて、この地方の若者は、性的成熟期に入っても、羊飼いや出稼ぎ職人として経験を積むために村を離れることが一般的で、結婚年齢も農耕地域の若者より高く、娘に比べて比較的選択権が認められていた。そのため、この種の歌では、若者が主人公として歌われることはあまりないし、その数少ない歌でも、娘たちの歌とはがらりと異なった内容になっている。

---

1. Чокманово-2, стр. 314-315. 同じ習わしは、言語や宗教、民族を問わずブルガリア各地で観察される。また、5 月 6 日、つまりキリスト教徒の聖ゲオルギの日で、ムスリムにとってはフドレレスの祭りに当たるこの日におこなわれる地域もある。私たちも、2001 年の同日に、北東ブルガリアのアレヴィ派のトルコ人ムスリムの暮らすマドレヴォ村とセヴァル村で、この行事を観察した。

2. вж. Родопи, стр. 110.

1. Овчар свири горе в планина

1	у	前置詞 у は、ロドピ方言では人を表す名詞と共に用いるのが一般的で、テクストのように場所を表す名詞に用いるのはまれである。西方言の中西部から北西部では、в > у の変化のために в と у が同一化することが知られている。вж. БДА-3, част 1 карта 311 и част 2, стр. 227.
2	пулето	= полето.
6	ненапуена	= ненапоена < ненапоен.
7	де	< къде.　срв. НГ, т. 1 и **къде** в РБЕ, т. 8. ここでは като あるいは дето の意味で用いられている。
	йе	*мест. 3 л. ед. ж. вин.* = я < тя.
	уфчар	= овчар.
	ут	= от.
8	че	結果、理由のニュアンスをもつ接続詞。срв. РСБКЕ, т. 3.
12	напуи	= напои < напоя.
	напуена	= напоена < напоен.

複数のインフォーマントによれば、この歌はロドピ地方本来のものではないという。語注で説明した通り、場所を表す前置詞 у の用法はこの地方の方言には見られない。その他の理由も勘案すると、この歌は у の使用が一般的なブルガリア中西部からもたらされたものと考えられる。

動詞 свири < свиря は「演奏する」の意味だが、羊飼いを主語とすると、民衆歌謡では、一般に、木製あるいは金属製で 70-80cm の比較的大きな縦笛カヴァル кавал を意味する。ロドピ地方を代表する楽器は、ガイダ гайда と呼ばれるバグパイプだが、作業に出ている羊飼いは、カヴァルもよく用いた[1]。

---

1. вж. Петково, стр. 124 и Чокманово-2, стр. 365-367.

2. Другият байрам иде да дойде

1	да	後続の動詞を強調するために用いられている。да のこの用法は、かつて中部ロドピ方言でよく観察された。вж. ГСМС, стр. 64.
	са … помина	*аор.* = помина се.

2	друген	= другият [байрам]. 文字通りには「もう一つのバイラム」という意味で、断食明け祭りのほぼ 70 日後に祝われる「もう一つの」祭りの犠牲祭（クルバン・バイラム）を指す。
	иде	< ида. вж. РБЕ, т. 6. да 構文で用いられて後続の動詞動作の確認のために用いられる。「～することになる」。
5	га	= когато. вж. РР, кн. 2.
6	преводем	ここでは「（遠くから）持ってくる」の意味。
8	инено	= юнено < юнен < юн < yün (T). вж. РР, кн. 2 には「（絹などの）高価な布地の」とあるが、インフォーマントの説明では「カシミヤのような薄手の高価な毛織物」をという。この意味の方がトルコ語の原義に近い。テクストでは инено が、続く копринено と語路合せで用いられている。

ロドピ地方のムスリムの若者たちにとってバイラム祭は、パートナーを探す最大の機会でもあり、若いカップルにとっては 2 人の仲を確認し固め合うまたとない機会であった。

娘は 12、3 歳の初潮年齢になると、両親は娘をもうあちこちに出さないようにし、娘にたいする監督を一段と厳しくしたといわれている。そのため、若者たちが心置きなく会える場所も限られることになった。ブルガリア・ムスリム（ポマク）にとってその重要なチャンスの一つが、バイラム祭であった[1]。

一方、若者について言えば、一般に農耕民は成人でも未婚なら親元を離れて独立することはないが、羊飼いは成人すると未婚でも自分の羊を持って親元を離れるのが習わしとなっていた。19 世紀末の中部ロドピ地方の羊飼いたちの生活を記録したヴァシル・デチョフによると[2]、彼らは、村を離れていても出身村の娘をパートナーとする村内婚がほとんどで、25、6 歳で婚約し 28 から 30 歳になって結婚したといわれる。その間に、家を建て、菜園や放牧地や村の近くの山を手に入れ、世帯を持つ準備をしたのである。同じように移動を事とした出稼ぎの場合も、婚約期間が長かったことが知られている。

このような長期にわたる婚約期間のあいだ、バイラム祭などの大祭があると、若者たちは出稼ぎ先や放牧地から村に戻り、離れて暮らす婚約者たちどうしが久々の再会をはたす機会となった。西ロドピ地方のヴェリングラドでは、この時ばかりはブルガリア・ムスリムの娘たちもベールを被らず、素顔で若者を迎えたという[3]。

採録歌では、主人公の若者が、バイラム祭が近づいても心待ちにするフィアンセや、思いを告白する娘がいないと打ち明ける。それが、バイラム祭の華やいだ雰囲気とはいっそう対照的に、この若者の心情を映し出している。

---

1. СбНУ, кн. 16-17, стр. 384.

2. Дечов-1968, стр. 342-390.

3. СбНУ, кн. 7, стр. 43.

3. За вас време няма ли да дойде

4	га	= когато.
6	селеман	*чл.* < селям < selâm (T)「挨拶」。срв. НПСР, стр. 539. この祭りで娘たちが踊る踊りの名称。下記の註解を参照。
7	засвале	= засваля. *св. 3 л. ед. ч.* < засвалям.
8	кичилоно	*чл.* < кичило. вж. РР, кн. 2. 「飾り、装身具」。
9	фесче	*умал.* < фес. IV-E-1 歌の註解を参照。さらに кривоно фесче については IV-C-3 歌の註解を参照。
10	рамцана	*чл.* < рамце. *умал.* < рамо.
	салтицана	*чл.* < салтица. *умал.* < салта. вж. РР, кн. 2. ブルガリア・ムスリム女性が用いる「腰から上部を被う上着」。< salta (T) < saltamalrka (T) .
12	кърсчено	*чл.* < къртсче. *умал.* < кръст.
	кошечено	*чл.* < кошече < кошак. вж. БЕР, т. 2. 「シャルヴァリの上から腰に巻く三角形の飾り布」。< kuşak (T).
14	снашкана	*чл.* < снажка. *умал.* < снага.
	шалварене	*чл.* < шалвари. *pl. tantum* として用いられている。ムスリム女性が身につける「もんぺ型のズボン」。
16	опустели	< опустял. 罵り言葉として用いて「いまいましい」。
18	вас	*pl. tantum* として用いられているシャリヴァリを擬人化して呼びかけているために、2 人称複数形の代名詞が用いられている。
19	ва	*мест. 2 л. мн. вин.* = ви.
20	фърлят	< хвърлят.
	кюшана	*чл.* < кюша. вж. БЕР, т. 3. 「隅、角」。 < köşe (T).
22	згърчат	< сгърча / сгърчвам. вж. БТР-4.「身をゆがめる」。
	срадана	*чл.* < срада = среда. вж. РР, кн.2. 「まんなか」。

掲載歌は、前半が省略されていてこのままでは理解しにくい。НПСР № 299、№ 300、№ 301 にはヴァリアントが採録されているが、例えば НПСР, № 301 は次ぎのように始まる、

— Неду, Неду, бела Неду,	「ネダ、ネダ、白いネダ、
снощи дойдох нах дома ти,	昨夜、君の家に来たけれど、
теб немêше, ти каде бê,	君はいなかったね、どこに居たんだい、
ти каде бê отишлàла?	どこへ行ってたんだい？」
— Бре юначе лудо-малдо,	「ねえ、狂おしい若気ざかりのあなた、
иê си ми бêх отишлàла	あたしは行ったの、
долу долу, в малка рѐка	下手の、下手の小さな川に、
бêло да пѐрам, плàтно да бêлêм.	下着を洗いに、布をさらしに。
Опрала го бêх, прострêла го бêх	洗って、干したの
по вейкине, по люлêкан.	枝にかけて、アカシアの木にかけて。

以下はほぼ採録歌と同じで、アカシアの木の揺れ動くさまを、バイラム祭で着飾った娘が晴れ着を脱いで行くさまに重ね合わせる。

ムスリムの若者たちにとってバイラム祭は、お互いに知り合い、結婚へつながる絶好の機会であった。それを逃すとまた一年、次の機会を待たなくてはならない。そんな絶好の機会だったのにお気に入りの若者に出会えず、失意のうちに晴れ着を脱いでゆく娘の不如意と憂さが歌われている。

селеман < селем は、トルコ語語源の語で、本来は selâm「挨拶」を意味するが、インフォーマントによれば、この地方で娘たちの踊る踊りを指す。この踊りは「на селем 挨拶で」[1]とも呼ばれる。娘たちは、手をつなぐと自然歩行のリズムで円を描くようにゆっくりと動き出す。ついで2人からなる娘が踊りの輪から出て2組に分かれて歌を重唱し、1節を歌い終わって曲の休止したときに、この2組が円の中心に向かって互いに近づいて行く。この向かい合った2組の娘たちのしぐさが「挨拶」を思わせるので、このように呼ばれるのだろうという。「挨拶」を終えると、2組はまた踊りの輪に加わり、別の2組が彼女たちに代わり、順繰りに引き継がれて踊りが続けられる。インフォーマントの説明では、この踊りはもっぱらバイラム祭で踊られたというが、他の文献によると「ダヴィドコヴォ村では『на селем 挨拶で』は、バイラム祭と結婚式（花嫁が実家から出て連れられて行くとき）に踊られた」という[2]。

15行目以降のテクストには、性的な含意が、特に最後の1行には性行為を暗示する表現が認められる。НПСР, № 301 でも、

“Бре шелваре опустели,	「ねえ、いまいましいシャリヴァリったら、
за вас денчок нема ли да дойде,	一人身の若者があんたを脱がす
да ва свали левтер юнак?”	そんな日が、あんたには来ないんじゃないかしら？」

と、同様の意図がより直截に表現されている。採録歌の対応部分では、3 人称複数形で主語が明示されていなが、ここでは「一人身の若者」と、具体的に示されているのも目を引く。

---

1. Родопи, стр. 274.

2. Пак там.

4. Там има три девойки хубавици

1	хранен	вж. НГ, т. 5, 馬を形容する語として用いられると、「十分に餌を与えられて、手入れの行き届いた」の意味で、хранен кон は「愛馬」を意味する。
2	идеме	*1 л. ед.* = идем.
4	дено	= дето < където. вж. БЕР, т. 1. -но は、ロドピ地方で用いられる遠称の指示代名詞 ной と同一の語源に由来する。
	сноща	= снощи. вж. НГ, т. 6.
7	ми	вж. НГ, т. 3. 強調や口調を整えるために民衆歌謡で頻用される小詞。
	диван седи	= [на] диван седи. 前置詞 на の省略。
8	фторана	*чл.* = втората < втора.
10	разведа	*аор.* < разведа / развождам. вж. НГ, т. 5. ここでは、「（馬に草を食べさせるために）あちこち連れてゆく」の意味。
14	сайбие	= сайбия. вж. НГ, т. 5. 「旦那、主人」。< sahib (T).
16	главен	вж. РР, кн. 2. 「婚約している、許婚者のいる」。
17	йе	= е < съм.
18	сига	= сега.
	вика	< викам. вж. РР, кн. 2. ロドピ方言では、「思う、考える、思いを声に出して言う」の意味で用いられる。ここでは 2 人の歌い手の統一がなく、もう 1 人は иска と歌っている。

この歌はさらに続くが、この先の歌詞を良く憶えていないとのことで、末の妹が馬に主人公のことを問いただすまでで終る。1950 年代に採録されたヴァリアント НПРК, № 659-663 も、多くは同様にこの部分までで、編者はこれらの歌を恋愛歌に分類している。そのなかで、採録地ダヴィドコヴォ村と歴史的にも親族関係でもつながりの深いマナスティル Манастир 村で採録された歌 НПРК, № 663 は、

次ぎのように続く、

той мисли тебе да земе.	ご主人はあんたと結婚しようと思ってますよ。
Нимой го зима, момне ле,	あの人と結婚するのはお止めなさい、お嬢さん、
че пие вино червено	赤いワインを飲むし、
и бяла бистра ракия.	白い澄んだラキヤを飲むんですから。

と、酒飲みの若者との結婚を避けるように娘に言い聞かせている。

НПСР, № 56は、ダヴィドコヴォ村の西約25kmに位置するチェペラーレЧеперале市で、1864年生まれのキリスト教徒女性から1954年に採録されたものである。出だしから中間部までは私たちの採録歌とほぼ同じだが、末の妹が若者のことを尋ねたら、на ракиê— баш делиê, / на вино — баш бе бекрѝê（[ご主人は]ラキヤでは — 大酒狂い、ワインでは — 大酒飲み）と言うようにと、若者自身が馬に言い含める。若者は、末の妹の求愛を予想して、これを避ける予防線を張ったのである。このヴァリアントでは、娘は馬からその言葉を聞いて、

Мòма си са чуди, мисли	娘は、驚き考えました、
òти хи кон накȍв дума,	何で馬は彼女にそんなことを言うんだろうと、
пък тà мисли да го зима !	そしてやっぱり彼を花婿にしようと考えました！
Юнак моми си викаше:	若者は、娘に言いました、
— Моме, моме, малка моме,	「娘さん、娘さん、小さな娘さん、
зимаш ли ма, малка моме ?	僕をお婿にするってのかい、小さな娘さん？」
— Зимам си та, бре юначе,	「あなたをお婿にするわ、ねえお兄さん、
зимам си та, вòди си ма ! —	あなたをお婿にするから、あたしを連れてって！」
Стана юнак, заведе ê,	若者は立ち上がり、娘を連れて行きました、
тури си ê варнê коне,	娘を青毛の馬に乗せ、
отведе ê у майка му:	娘を母親のもとに連れて行きました、
— Йêла, мале, òтвори ми,	「さあ、かあさん、開けてくれ、
че ти водêм млада булка ! —	あんたに若い嫁さんを連れてきたから！」
Пуста майка мащеха е,	いまいましい母親は継母で、
та не чуе да отвори.	声を聞いても開けようとしませんでした。

と続く。興味深いのは編者が付した注で「加冠式のあと新郎の家の宴席で歌われる」とあり、この歌が婚姻儀礼歌の様式を保つより古い形を維持していると考えられる点にある。他のヴァリアントを調べて

みると、ソリシタ Солища 村では婚約式で[1]、ゲラ Гела 村では新郎側の一団が花嫁を迎えに行くときに歌われた歌[2]だという。

私たちの採録した多くの恋愛歌に見られることだが、19 世紀に保たれていた婚姻儀礼が簡素化されてゆくなかで、この歌も、後半部分をそぎ落として内容を改変させ、新時代の潮流にマッチした恋愛歌として人びとの記憶に伝えられてきたものと考えられる。

---

1. Солища, стр. 324.
2. Родопи, стр. 171.

5. Шинка без любе бива ли

1	търнал	< търна = тръгна. срв. НПСП, стр. 540.
2	нис	нис < низ, вж. РБЕ, т. 10. ここでは、下方へ向かう斜面上の運動を表す。ロドピ地方の民衆歌謡ではこの用法が広く用いられる。
	криво, лево	криво「曲がった」は сокаче を形容する言葉として用いられているが、慣用句の криво, лево「まあまあ、どうにかこうにか」に引かれて лево「左の」が加えられた言葉遊び。
	сокаче	*умал.* < сокак < sokak (T). 「通り」。この語については、さらに IV-K-3 歌の註解を参照。
3	каваче	= кавакче. *умал.* < кавак. вж. PP, кн. 2. 'топола' < kavak (T).「ポプラ」。
8	кано	вж. PP, кн. 2. = като.
8-9	кано …, като …	8、9 行とも同一内容だが、8 行目ではロドピ方言 кано が、9 行目では標準語の като が用いられている。方言と標準語の併用や、リフレインでの言い換えといった現象は、1960-70 年代以降の採録歌にしばしば、みられる。教育とマスメディアの普及によるのであろう。
10	любиш	< любям = любя. 「愛する」意味では、この地方では галям = галя が一般的だが、ここでは любе「恋人」に引かれて同根の любиш が用いられている。

この地方の民衆歌謡で、鳥はしばしば擬人化されて登場する。しかし、鳥は、総称的に пиле「小鳥」あるいはその指小形の пиленце と呼ばれ、固有の名前で出てくる鳥は、гарван「カラス」、кукувица

「カッコウ」、славей「ナイチンゲール（サヨナキドリ）」、гълъб「ハト」、орел「ワシ」、сокол「ハヤブサ」などにほぼ限られ少ない。また пиле / пиленце とだけ呼ばれた時にも、これらの鳥、特に кукувица と славей を表していることが多い。採録テクストのように пиленце と славейче が同格で並べられて歌われる場合もよく見られる。

IV-K-10 歌や V-E-4 歌にも見られるように、渡り鳥の郭公が広い空間を飛んで遠くの知らせを伝えたり不吉な未来を予言することもあるのに対し、ナイチンゲールは娘のよいお喋り相手であり、娘の歌声がこの鳥の鳴き声にたとえられることもある [1]。ナイチンゲールの持つそのような特性が、私たちの採録歌全体の雰囲気をうまく醸し出している。

---

1. НПСР, № 262.

B. 出会い

20 世紀に入って若者と娘の交際が徐々に自由になってゆくまでは、彼らが互いに好意を告白する場所は極めて限られていた。かつては移牧や出稼ぎが男たちの主たる生業で、長期にわたって、村を離れることが多かったためである。さらに、男女の職業分担が農耕民の場合以上にはっきりしていて、男女共同で行われる作業が極めて限られていたことも忘れてはならないだろう。

出会いの場所で第 1 にあげられるのが祭日で、キリスト教徒の場合は復活祭や聖ゲオルギの日（5 月 6 日）、ブルガリア・ムスリム（ポマク）の場合は断食明けの祭りのラマザン・バイラムと犠牲祭のクルバン・バイラムおよびフドレレス（5 月 6 日）がその主な機会であった。このフドレレスは、ムスリムたちの祭日だが、イスラム以前にさかのぼる農事暦に起源するもので、聖ゲオルギの日と同じ 5 月 6 日に行われた。この日は、ほぼ立夏に当る。自然の営みや農作業が太陽の運行と密接に関連しているために、宗教の違いを超えて、農繁期を画する祭日としてこの日が重要視されたのである。

キリスト教徒、ムスリムを問わず、これらの祭日には、大木の枝に太い縄が結わえつけられてブランコ [1] が設置され、広場ではホロー（チェーンダンス）が催されて、そこが男女の出会いの場となった。テクストの註解において各所で触れたように、この日になると放牧に出ていた羊飼いや出稼ぎの若者は村に戻り、掟の厳しかった 19 世紀のムスリム社会にあって娘たちもこの日に限り被り物を取ることが許される村もあった [2]。

もう一つの出会いの場として、メジェ меже / меджия とポプレルカ попрелка があげられる。これらは、どちらも互助的な無償の共同作業で、村誌などではしばしば同列に論じられているが、次ぎのような相違が認められる。メジェは、タバコ葉の収穫とその葉を糸でつないでまとめる乾燥準備 [3]、トウモロコシの皮むきなど短期間に多くの労働力が必要とされる農作業や、学校、教会、モスクなどの公共施設あるいは個人住宅の建設資材の運搬などの共同作業を指す。これに対してポプレルカは、糸紡ぎなど、急ぎではないが 1 人でやるには単調な農閑期の作業を軽減するために、皆で集まって行う共同作業を指す。この場合、呼びかけ人の羊毛を無償で紡ぐことも、呼びかけに応じる娘が自分の羊毛を持ってきて自家用の糸を紡ぐ場合もあった。上記のような作業の性格から、ロドピ地方では秋のメジェ、冬のポプレルカ [4] と言い習わされていた。

これら 2 つの出会いの場が、地域共同体の認めるものであり、村権力や年長者の監督と監視の下に置かれていたのに対し、水場はその規制が弱く、若者から娘への直接的な求愛が行われる場になっていた。水汲みは娘たちの重要な仕事であった。水は、天秤棒の両端につるした陶製の壷や金属製の鍋に汲んで、

朝夕2回運ばれた。夕方になると若者は思いの娘を泉のそばで待ち受け、喉がかわいたので水を飲ませてくれと頼む。娘が若者を憎からず思っていると、無言で求めに応じて水を飲ませた。ここでも2人の関係は、言葉ではなく、しぐさで確認されたのである。

それだけに、水場で若者たちは、とりわけ娘は、隣近所の人たちや両親に、なかでも自分の母親に2人の関係を悟られないように気を使った。逆に両親、特に母親は、彼らの行動を注視し、目を離そうとはしなかった。そのため、2人の馴れ初めをスムーズに運ぶために、若者は、同年代の未婚の姉妹や親戚の娘を介して、娘の真意を探ろうとしたことがよくあったと伝えられている[5]。娘と母親と若者の関係から生ずるこのような心理の彩は、ロドピ地方の民衆歌謡の重要なテーマとなっている。

ただし、ロドピ地方では、長年、移牧や出稼ぎが男たちの伝統的な生業になっていて、彼らは村を離れて暮らすことが多かったので、水場が出会いの場として一般化するのは、この地方が国民国家の枠内に再編されて国境を越えた移動が難しくなり、冬営地をもたない近距離型の放牧やタバコ栽培などの定着型の農耕が広まる20世紀に入ってからのことであった。

1930年代から40年代に入ると、ロドピ地方の村に水道が普及し始めた[6]。娘たちは、もはや朝夕に水汲みに外に出てくる必要もなくなり、若者たちの出会いの場だった水場も徐々に廃れていった[7]。

このような時代の変化が、共同体の問題から個人の問題と変化してゆく若い男女の関係のあり方と平行していたことは見落としてはならないだろう。

---

1. この祭りを知る年長のインフォーマントは、娘たちは健康を祈願してブランコに乗ったという。この習俗は、ブルガリアに広く流布している太陽の結婚という民衆バラードにも現れている。古くは1859年にラコフスキが発表したコテル地方のものに (На личен ден Гергьовден / златна са люлки спуснали / на Грозданкини дворове. / Вървяло мало, голямо / за здраве да се людее. 聖ゲオルギのハレの日に、/ グロズダンカの家の庭に / 金のブランコが吊るされて、老いも若きもやってきた / 健康を祈願してブランコにのるために) — БНТ, т. 4, стр. 80-81 —、新しくは1981年に採録されたスリヴェン地方のものに —СбНУ, кн. 60, ч. 1, стр. 50 — 見られる。この太陽の結婚は、自分よりも明るく輝く娘グロズダンカにほれた太陽が何とかしてこの娘を娶ろうとして母親に相談したところ、聖ゲオルギの日に金のブランコを下ろせば、誰もがこれに乗ろうとするから、グロズダンカの乗ったところで引き上げればよいと助言して、ことが運ぶ。ここには、聖ゲオルギの日（5月6日）、つまり立夏という農繁期を画するときに、太陽神と大地女神との結婚によって新しい作物の生長を予祝する豊穣儀礼の要素が見て取れるだろう。このことは、この祭りでは娘がブランコに乗るのを常としていること、太陽の結婚のバラードには、植物や子供の成長を促す威嚇的な呪言を含むストーリーが序章として組み込まれているもの（СбНУ, кн. 60, ч. 1, № 1, № 2）もあることからも推察される。ブランコと豊穣儀礼については、さらに James G. Frazer, The Golden Bough (the 3rd edition), Part 3 The Dying

God, Macmillan, London, 1966, pp. 277-285 を参照。

2. СбНУ, кн. 7, Хр. П. Константинов, 'Свадбарски обичаи и песни от Чепино,' стр. 43.

3. 中部ロドピのチョクマノヴォ村でタバコに関連したメジェが行われるようになるのは、1920 年以降のことである。Чокманово-2, стр. 362 参照。

4. ポプレルカはロドピ地方で用いられる名称で、他の地方や標準語ではセデャンカ седянка と呼ばれる。

5. Родопи, стр. 152.

6. Петково, стр. 296.

7. Орехово, стр. 296

1. Байрям се мина, помина

2	малък	= малък байрям. 本テクストおよび III-1 歌の註解を参照。
	иде да дойде	*3 л. ед.* иде < ида. 中部ロドピ方言では、3 人称の単数形あるいは複数形を接続詞 да あるいは та で他の動詞現在形と結んで、確認・強調の意味で用いる。вж. ГСМС, стр. 65.
4	свале	< свалем = свалям.
5	кана	= къна < kına. (T) 「（化粧用の）ヘンナ」。この地方のブルガリア・ムスリムの女性は、結婚式や祭日になるとヘンナで手の爪や髪を染めた。вж. СбНУ, кн. 7, стр. 47.
6	черън	= черен.
	въгъл	вж. РР, кн. 2, 'въглен'. 「炭」。ここでは「炭のように黒いもの」の意味で用いられている。
8	севде	< севдя = севда. 「恋人」。
	са сме видвали	< видвам се. *несв.* < видя. вж. РБЕ, т. 2. ロドピ方言における体の形成については срв. ГР, стр. 216.
	с севде не са …	この地方で一般的な語順は、с севде <u>са сме не видвали</u> となる。標準語では със севда <u>не сме се виждали</u> の語順で、採録歌に見られる語順は、標準語の普及に伴って起きた混乱と考えられる。この地方の方言における語順については、вж. ГСМС, стр. 64-64.
10	ф сраде	< в сраде = всред. срв. **сраде** в НПСР стр. 539.
	байраман	*чл.* < байрам. вж. НПСР, стр. 527. ここでは「（バイラム祭の開催される）広場」の意味。通常、祭りの期間中この場所にブランコが設置され

		る。
11	карши	вж. РР. кн. 2. ＜karsı (T). 「向かいに、向かいで」。
15	кипри	＜кипър. вж. РБЕ, т. 7. 「（格好良く見せるために口元を）すぼめた」。
18	пламен	вж. РСБКЕ, т. 2.「炎」。東方言では пламък. срв. камен ~ камък 「石」.
	на мене	1930 年に同じダヴィドコヴォ村で採録されたヴァリアントは на сорце (сърце)と歌う。この方が22行のсърцеとの意味のつながりが明確になる。вж. Стоин, № 405.
20	суни са	вж. НПРК, стр. 968 は суни са を命令法とし、これを ела насам（こっちへ来い）の意味と説明する。＜сунам са. вж. РР, кн. 2. 通常のロドピ方言では「這う、にじる」の意味。
21	лудо и младо	лудо и младо「狂おしく若い」は若者を形容するエピセットで、テクストに見られるように、娘から若者への呼びかけの際に頻繁に用いられる。лудо は満ちてくる力や生命力を制御できないという意味で、性的な含意もある。
22	сърцено	*чл.* ＜сърце. ここでは「（恋の炎にもえる）心」の意味。
26	осемнайси	= осемнайсети.

ロドピ地方のブルガリア・ムスリムは、断食明けの祭り（ラマザン・バイラム Рамазан байрам）を大祭 Голям байрам と呼び、そのほぼ 70 日後にくる犠牲祭（クルバン・バイラム Курбан байрам）を小祭 Малък байрам と呼ぶ[1]。これは、前者を小祭 Küçük bayram と、後者を大祭 Büyük bayram と呼ぶトルコの場合と逆である。テクストと同様の歌い出しの歌は、Стоин, № 405、НПРК, № 1413（Голем ми байрам поминал / и малек иде да дойде）、НПЮЗБ, т. 1, № 876-877 など 1930 年代以降に西部・中部ロドピ地方およびピリン地方で採録されており、バイラムの名称が個人的な誤解でないことはこのことからも確かめられる。トルコとブルガリアのあいだで、2 つのバイラム祭の名称になぜこのような逆転が起きたのか、不明である。

ラマザン・バイラムで思いの若者を見初めた娘。その晴れやかな気持ちが続いて、晴れ着は着たままで、手に描いたヘンナの化粧もそのままに、次に来るクルバン・バイラムの祭りが待ち遠しい。その祭りの広場でやっと出会った若者も、娘に好意のしぐさを送り、自分の心についた炎を消してくれと頼む。この頼みに、娘は機知のある答えを返す。

すでに解説で触れたように、ムスリムの若者にとっては年に 2 度催されるバイラム祭が、キリスト教徒の若者にとっては復活祭や聖ゲオルギ祭が、男女がお互いに知り合うまたとない機会であった。

しかし、新しい時代を告げる社会変化が地域にまで及び、人びとを律していた倫理的規範が急激に変

化し始める 20 世紀初頭までは、若い男女の行動には、さまざまな社会的規制がかけられていた。キリスト教徒の方がムスリムより比較的自由であったとは言え、直接のコンタクトは、どちらの場合でも禁じられていた[2]。

コンスタンティン・カネフは、19 世紀後半にキリスト教徒の暮らすモムチロフツィ村の祭りの踊りの広場で起こったこんなエピソードを伝えている。

「このような公共の娯楽の場で、若者たちは互いに好意を抱くようになった。当時、若者と娘の接触は制限され、監視の目が光っていた。ホロー（チェーン・ダンス）でクルテュ・バルカラは、『男と女はもっと離れなければいかんぞ』と大声で叫んだものだ。『男女の混じり合った шарено』ホローは、厳禁だった。娘に近づこうなどと大胆なことを考える若者は誰でも、組合や長老たちからお叱りを受けた。この不文律を犯した者は厳しく罰せられた。ホローで何度も違反を繰り返す若者は、『村のお仕置き селска тербеьо』と見せしめに『ホローの踊り場の便所 хорищенския нужник』に閉じ込められた。大きな祭りになると、公共の掟に従わなかったとして村の便所に閉じ込められる者が続出したものだ。そこで、ホローの踊り場で道徳的な掟に違反した者は、パパゾオウル・コリュの店先の踊り場の柳の木にも縛りつけられた。

ある年のこと、まだ若者だったムソルリヤタ・イルチョにもこんなことが起こった。彼は、結婚式でしこたま飲んでホローの輪の真中に馬で乗りつけると、人びとを蹴散らしてホローを踊ろうと馬から下りてきた。娘たちのなかへ入って手をつかもうとすると、彼女たちはとたんに散り散りになった。

長老や年配の者たちは彼に跳びかかると、村長（むらおさ）の屋敷から縄を 1 本持ってきて、『ホローの踊り場の柳の木』に縛りつけた。この出来事はクリミア戦争後のことで、以来、この柳の木に縛りつけられることは、村の社会秩序の違反者にたいする最も恥ずべき罰となった。辱めを受け恥をさらしたイルチョは、翌日、意を決してエジプトに逃げ[3]、村には戻るまいと心に決めた。彼がエジプトへ行ったかどうかは分からないけれど、3 年して戻ってみると、それまでイルチョ・ガイダーラと呼ばれていた彼を、村びとはその頃にはもうムスルリーヤタ（エジプト人）と呼んでいた。そしてあの柳の木も『エジプト人の柳 Мусурлиевата върба』となったのである。

娘たちの前で自由大胆な振舞いをしようとする連中には誰でも、年配の者たちが上から叫んだものだ。『おいおい、見たぞ、エジプト人の柳がほしいのかい』と。若者や娘たちは、混じり合ったホローをしたから[4]、村の踊り場にふさわしからぬ振る舞いをしたからと言っては、家で父や兄に何発くらったことだろう。

若者たちの愛は『可愛がり』で始まった。この可愛がりを、私たちは『目でかわす愛の言葉』と呼ぶこともできるだろう。若者たちは、遠くから互いに眼差しを交わした。最初は短くさっとおずおずとだ

が、後には彼らのことに誰もが気づいて、『夕方、俺たちのタデュはミカ・チョデュスカを可愛がっていたな』ということになるのである。そんな眼差し[5]が交わされると、娘は、たいてい若者の従妹や親族の娘を介して、付き合いの申し込みをうけることになった」[6]。

さて、採録歌に戻ろう。歌い手は1929年生まれだが、彼女が若かった頃、若者に面と向かって「好き」、「嫌い」を言うのははばかれるので、歌好きはたくさんの歌を覚えていて、歌でほのめかしながら返事をしたという。それを念頭に置くなら、16行目以降の娘と若者のかけあいは実際のせりふを写したものではなく、決して言葉にされることのない若者たちの心情を歌に託したものと解釈できるだろう。そのようにして、歌の言葉は誰もが用いることのできる定型句として抽象化され、時には軽妙な諧謔として、また時にはつのる思いを伝える印として、目配せという補助記号も用いて状況に応じた幅のある使われ方をしたに相違ない。

12行目以降で歌われている бели ръки（白い手）、черни очи（黒い瞳）、кипри уста（綺麗な唇）は、娘や若嫁を形容する常套句として用いるのが一般的だが、ここでは恋人の男性をあらわすために用いられている。

---

1. Родопи, стр. 115.
2. Момчиловци, стр. 597-598 и Забърдо, стр. 132-133.
3. イルチョが逃亡先としてエジプトを考えたのは、決して突拍子もないことではなかった。当時オスマン帝国の宗主権下にあったエジプトへはブルガリア人の職人が出稼ぎにでかけ、多くの商人がアレクサンドリアに支店を構えていた。例えば、ブルガリア中西部の町コプリフシティツァ Копривщица では、この時期牧羊業が盛んで、それを基礎とした家内工業的な繊維産業も勃興した。エジプトはその製品の重要な市場で、マサルリーヤ мъсърлия（エジプト者）と通称される仕立て職人や、さらには乳加工職人がこの地で出稼ぎとして活躍していた。вж. Копривщица, 248-249. さらに寺島憲治、「バルカンの移動労働と出稼ぎ」、『イスラム圏における異文化接触のメカニズム 3』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1994年、83-84頁参照。
4. このモムチロフツィ村から20kmほど南に位置するチョクマノヴォ村では、1930年頃まで「男女の混ざり合ったホロー」はなかったという。вж. Чокманово, стр. 320.
5. 眼差しによる好意の告白については、さらに СбНУ, кн. 9, стр. 30、Забърдо, стр. 132、Соколовци, стр. 310、Турян, стр. 222 など多くの記録や地方誌に述べられている。
6. Момчиловци, стр. 597-598.

2. Водице бистра, студена - I

2	хитричко	*умал.* < хитро.
	ше	< ще.
4	ми	вж. НГ, т. 3. 語調を整えるための小詞。
	дохада	*аор.* < дохадам (*св.*) = доходам. 「やって来る」。 PP, кн. 2 によれば дохадам は主にブルガリア・ムスリムの村で用いられ、キリスト教徒の村では доходам が用いられるという。
5	йотхада	*аор.* < отхада < отхадам (*св.*) = отходам. 「行く」。PP, кн. 2. отхадам も同様に、ブルガリア・ムスリムの村で用いられるという。
6	черночко	= черноочко < черноочки. *умал.* < черноок.「黒い瞳の」。черен と око の 2 つの語から形成された形容詞は、черноок と о を 2 つ重ねるのが正しいとされるが、民衆歌謡ではしばしば見出し語のように母音が 1 つに縮約される。
7	ма	*мест. 1 л. ед. вин.* < йе = аз. ここでは водица が答えているので、1 人称単数形の人称代名詞が用いられている。
	оглева	< оглевам. 「見つめまわす」。 PP, кн. 2 よれば主にブルガリア・ムスリムの村で用いられるという。
10	уйгун	*неизм. прил.* < uygun (T). ここでは「均整の取れた、すらりとした」の意味で用いられている。вж. НПСР, стр. 540.
	снашка	< снажка. *умал.* < снага.
	нараме	< нарамем. вж. PP, кн. 2. 「肩にかける」。
11	и	調子と音節数を調整するために挿入された接続詞の и で、強調の意味も含む。
	насе	< насем = нося.
12	прис	< през.
	ливи	< леви < ляв.
	криви, ливи	IV-A-5 歌の語注を参照。
14	кьошкьове	< кьошк. вж. PP, кн. 2. 「（2 階の夏用の）客間」。
15	марна	< марен. вж. PP, кн. 2. 「（水が）少し温かい」。
	отмаре	< одмаре < одмарем. вж. PP, кн. 2. 「少し温める」。
18	морнана	< морен. вж. PP, кн. 2. 「黒い」。

このテクストでは水が誰と話しているのか明示されていない。しかし、水場が若い男女の出会いの場

であったことを考慮すれば、若者が、思いを寄せている娘について水に尋ねている、と理解できる。НПСР, № 451 などのヴァリアントは、はっきりと水と若者の会話形式をとっている。

このヴァリアントでは、最初に水汲みに来たのはシンカだ、と水が答える。そこで、若者は、シンカのところへ行って、仲間の娘たちに自分のことを誉めて回ってくれ、とシンカに頼む。仲間はみんな婚約していて、彼のことを誉めて聞かせるよう娘がいないというと、若者はシンカに答えて、井戸にいって覗いてごらん、水の中に見える娘がその娘だよと言う。НПРК, № 202 では、若者は、娘が誰と結婚したいと言っていたか、と水に尋ねる。

この採録歌を歌い終わってから、歌い手の1人のビストラ・ガジェヴァさんが、есни шалваре да пере を最後の行につけ加えるべきだと説明した。しかし、この1行を加えると、歌の終わりの部分の構成が整わなくなる。後日、2人に別々に歌ってもらった歌を次に掲載した。

3. Водице бистра, студена - II

4	кина	вж. РР, кн. 2.　ロドピ方言のこの疑問詞は物にも人にも用いる。ここでは、もちろん人に用いられて「誰」の意味。
6	било	< бело = бяло < бял.
8	оннасе	< однасе < отнасе < отнасем = отнася. 「運んで行く、運び去る」。 вж. ГР, стр. 216.　тн > дн の変化は、ロドピ方言にしばしば観察される。срв. БД, стр. 217.　また、дн > нн の子音変化は、ブルガリア各地に広く観察される。
12	навър	< навръх.　вж. НГ, т. 3 и **връх** в БЕР, т. 1.　「一番上に、頂きに」。

掲載歌は、前掲歌が歌い手のあいだで歌詞の不一致や後からの付加があったために、後日、ファトメ・デルヴィシェヴァさんに1人で歌ってもらったものである。ほぼ同じ歌詞の展開ならが、語の選択や語形に、前掲歌とは大きく異なる点がいくつか認められる。

4. Водице бистра, студена - III

3	дохода	前掲の第2歌の語注を参照。前出の дохада ではなく、ロドピ地方で一般

		的に用いられる дохода を用いている。同じ歌い手による後出のヴァリアント IV-B-5 歌では、дохада が用いられている。
8	кърсче	< кръсче < кръстче < кръст. 「腰」の意味だが、次ぎの нараме「肩に担ぐ」と整合性が取れない。同じ歌い手がもう一度同じ歌を歌っているが、そこでは с уйгун ма снашка онниса と歌っている。
12	исни	< ясни < ясен. вж. РР, кн. 2. 「色鮮やかな」。地元の 50 歳代の女性インフォーマントによれば、ダヴィドコヴォ村では、есни шалваре と言うとき、この есни は червени（赤い）の意味で、そのシャリヴァリは模様のない светло-червени（明るい赤）の 1 色だけのものが一般的であったという。

先に掲載した IV-B-2 歌を歌った 2 人のうち、ビストラ・ガジェヴァさんが 1 人で歌ったもの。前掲のファトメ・デルヴィシェヴァさんの歌とは異なる点が、いくつか認められる。最初の歌ではこれが 2 人の歌詞の不一致になって現れたのであろう。

Стоин-1934, № 513 のヴァリアントでは、本テクストとほぼ同じ内容の歌詞に続けて、鮮やかな色のシャルヴァリを洗う理由が、че ги [шалвари] е юнак опаснил（若者がそれ[シャルヴァリ]を汚してしまったから）と説明されている。シャルヴァリは、IV-A-3 歌でも見たように、しばしば性的な含意で用いられる。最初の歌で、ファトメ・デルヴィシェヴァさんがシャルヴァリについては歌わずに、морнана коса да реше（黒い髪をくしけずるため）としたのは、性的なほのめかしを避けたためかもしれない。

5. Водице бистра, студена - IV

3	ми	前掲歌とは異なってここでは標準語の疑問詞 кой「誰」が使われて音節が一つ少なくなったために、ми が補足されている。
8	онниса	< отниса < отнисам = отнасям.

前掲歌と同じくビストラ・ガジェヴァさんが歌ったものだが、前掲歌と比較してみると単語の選定や描写のしかたに、いくつかの違いが認められる。歌詞が、しっかりと記憶されたものであるか否かという問題の他に、マスメディアと教育の普及による標準語の浸透や、人の移動と接触の広域化に伴って、標準語と方言、上位の方言と下位の方言が入り混じって揺れているためである。

6. Подай ми, моме, водица

1	йе	= е. *3 л. ед.* < съм.
	мари	本来は、強調や女性にたいする呼びかけの言葉だが、ここでは奇数行末で調子を整える囃子言葉として用いられている。この言葉を除くと、テクストは全行 8 音節で統一されている。
2	чернана земе	*чл.* < черна земе = черна земя. 民衆歌謡では черна は、しばしば земя にかかるエピセットとして用いられる。
4	йе	*мест. 3 л. ед. ж. вин.* < я < тя. вода を指している。
5	филдженчек	*умал.* < филджен < filcan = fincan (T). 「杯、（コーヒー用の）デミタスカップ」。вж. PP, кн. 2.
	йе	*мест. 3 л. ед. ж. вин.* < я < тя.
12	теп	< теб < тебе.
	са съм заболел	< заболя се. ここでは、「（異性を思って）胸が締めつけられる」の意味で用いられている。この意味での用法は、中部ロドピ地方の民衆歌謡に良く見られる。вж. PP, кн. 2.

この歌は、中部ロドピのブルガリア・ムスリムとキリスト教徒のどちらからも採録され、НПРК, № 432, № 433, НПСР, № 642 などに刊行されている。私たちの採録テクストでは、娘に恋焦がれた若者が水を求めて娘に近づく場面で終わっているので、この歌を恋愛歌に入れた。多くのヴァリアントでは、さらに続けて娘を略奪する情景が歌われているが、私たちの歌い手は知らないという。

例えば НПСР, № 642 では、母さんの言いつけだから水はあげられないと断る娘を、若者は拝み倒して、水を差し出した娘の手をつかんで馬に乗せ、馬に命ずる。

— Превзимай, коню, прегра̀бъй,	「なあ馬よ、［娘を］捕まえたぞ、盗んだぞ、
ситно ми зимай рава̀нан,	細かな跑足をとるんだ、
по-боржъ си на о̀ткарай	俺たちの家のうるわしの中庭に
на нашъ равнъ дворовъ,	急いで俺たちを連れてゆけ、
че во̀гêм мома кра̀гêна !	盗んだ娘を連れてゆくのだから！」

私は母さんの一人っ子、父さんのお気に入りの娘で、母さんは水を待っているから放してくれと懇願する娘に、若者は言う。

— Хайдъ ми, хайдъ, момицъ,	「さあ、さあ、娘さん、
и йê сам един на майка	俺も母さんの一人っ子、
и пѐтумничък на баща !	俺も父さんのお気に入りの末息子さ！
И моê майка са нàдê	俺の母さんも待っているのさ、
ѝзмêна да хи òтведа.	母さんの代わりになる嫁を俺が連れてくるのをね」

続きの部分をも含めて考えるなら、この歌は恋愛歌には分類されない。

ロドピ地方でまだ略奪婚が頻繁に行われていた時代の同時代人としてストユ・シシコフは、この慣習の事例を豊富に含んだ記録を残している。彼によれば、両親や周囲の反対を押し切って結婚を望むカップルが合意の上で演出しておこなう、駆け落ちとも言える色恋沙汰の略奪婚も行われたが、経済的な理由や復讐のため、あるいは成人男性としての大胆果敢さを周囲に見せつけるためなど、恋愛感情とは必ずしも結びつかない略奪婚もしばしば行われていた[1]。

ヴァリアントでは、母親の代わりになる女性を家に迎え入れる目的で行われた略奪婚が歌われている。20 世紀初頭まで出稼ぎや移牧の盛んだったこの地方では、家事や育児、菜園の管理など本来の主婦役のほかに、男性の不在時に代役として、家族をまとめ、時には力仕事もしなければならない主婦の仕事を、高齢化した母親から若い嫁へと間断無くつないで行くことは、ブルガリア・ムスリム、キリスト教徒を問わず、重要な家庭問題でもあった。

かつてこの地方の村では、「羊飼いが 30 歳を過ぎても結婚しないと適齢期を過ぎたとみなして、村が世話役になって彼らを結婚させた」[2] ともいう。世代交代による労働力の更新と継承もさることながら、夫婦を単位とする家庭を秩序の源泉とみなしていたからであるが、そのような社会にあっては、略奪婚も村落地域社会の問題としてイマームや司祭、あるいや有力者が調停に乗り出して比較的寛容に扱われていた[3]。

ヴァリアントは、そのような社会的風潮のなかで生まれた歌で、私たちの採録歌は、略奪婚の風習が廃れてゆくなかで、その風習を歌う後半部を脱落させ、恋愛歌に姿を変えて歌い継がれてきたものと考えられる。

---

1. РодНапр, год. 4, март и април 1906, кн. 2, стр. 53-58.
2. Дечов-1968, стр. 375.
3. Дечов-1968, стр. 378-379.

7. Ти да го носиш, аз да те гледам

1	терзия	「仕立屋」の意味だが、ここでは次行の абаджие の同義語として用いられている。абаджие = абаджия は「アバ布を扱う商人」の意味。「アバ」は、手織りの厚手のラシャの布地を言うが、「仕立屋」が「アバ商人」、「アバ商人」が「仕立屋」を兼ねる場合がしばしばであった。вж. Петково, стр. 34. さらに下記の註解を参照。
3	та лу …, та лу …	лу はここでは強調の意味で用いられている。срв. ГСМС, стр. 63.
4	гевезиен	= гевезен < güvez (T). 「臙脂(えんじ)色の」。вж. РР, кн. 2.
5	оддолу	= отдолу.
6	Фатминчица	ムスリム女性の名前 Фатма < Fatma (T) にブルガリア語の女性指小辞 -инка をつけて形成された Фатминка にもう一度、女性指小辞 -ица をつけて形成した愛称形。ロドピ地方におけるこのような指小形の形成法については、вж. УРГ, стр. 16-17.
7	те	*мест. 3 л. ед. ж. имен.* = тя.
8	терзие	= терзия.
10	фустанчено	*чл.* < фустанче *умал.* < фустан < φούστα < fusta (It). 下記の註解を参照。
14	йе	*мест. 1 л. ед. имен.* < я = аз.

フスタン фустан は、ジャンパースカート型の女性の上着で、同じような型のスクマン（この地方ではヴァルネニク вълненик と呼ばれる）が自家製の荒織り毛織物を用いるのとは異なって、藍色や臙脂色の薄地の毛織物や絹布が使われた。ダヴィドコヴォ村の南西約 25km に位置するチョクマノヴォ Чокоманово 村では、フスタンは 19 世紀末頃から 20 世紀初頭にかけて富裕層の娘たちや若嫁のあいだで流行し[1]、祭りや祝い事があるとフスタンで着飾った[2]。このタイプの晴れ着は、第 1 次大戦前後の頃まで良く見られたという[3]。

中部ロドピ地方では、また広くブルガリアの農村地域でも、仕立屋の多くは兼業で、農閑期に得意先の村むらを回って仕立てをした。布地は、当時どこでも女性たちが自前で紡ぎ織っていたので、それを使うことがしばしばだったが、仕立屋が持参した物を使うこともあった。さらに仕立屋が、女たちが織ったアバ布の仲買をする商人の役割もはたした。語注で指摘した、「仕立屋 терзия」と「アバ布商人 абаджия」の意味の併用や混用は、そのような状況から生じたものである。

このような形態の仕立屋は、その後も第 1 次大戦頃まで続く。その一方で、1826 年のマフムート 2

世によるオスマン帝国の軍制改革をきっかけに羊毛や毛織物の需要が増大し、彼らのなかから規模の大きなアバ商人や仕立屋が勃興した。彼らは地元の羊毛を買い集めて、地元の女性たちに糸紬や機織を積極的に奨励して請け負わせ、できた布地を都市や定期市に運んで販売したり、あるいはドラマやクサンティなどエーゲ海沿岸の都市に店を構えて仕立てた製品を販売したのである。都市に構えた店は工房も兼ねており、ここで働く職人は雇い主と同村、同地方の出身者が多く、見習い期間を終えて職人になると、春から夏にかけて — キリスト教徒の場合、復活祭から旧暦 8 月 15 日の至聖生神女就寝祭（カトリックの聖母被昇天の祝日に当たる）の頃に — 村に戻り、秋が近づくと出来た品物を積んでまた工房に戻り、ここから定期市や得意先を回ったのである。

チョクマノヴォ村のそんな夏の様子を知るストヤン・G・キロフ Стоян Г. Киров は、「どの集落を通っても、3、4 人で集まって縫い物仕事をする仕立屋たちの歌声がどこかのベランダから聞こえた。隣の集落に行けば、似たようなグループを作って木陰や日陰に房飾りのついた敷物を敷いて、縫い物をしながら歌っているまた一組の仕立屋を目にしたものだった」[4] と、当時の姿を伝えている。

私たちの採録歌は、そのような場所で歌い継がれてきたものだろう。指小形を重ねた固有名詞や、娘への当意即妙な問いかけなどこの歌のもつ「軽み」に、羊飼いとは異なって、都市での暮らしと客あしらいで身につけた出稼ぎ仕立屋の心のありようを見て取ることができる。

---

1. Чокманово-2, стр. 199.
2. Цит. съч., стр. 130.
3. Цит. съч., стр. 200.
4. Цит. съч., стр. 115.

8. Райковско бело момиче - I

2	Райково	1960 年にスモリャン市 гр. Смолян に合併され、同名のライコヴォ区 квартал Райково となっている。1934 年の国勢調査では 2723 人の人口を有するかなり大きな村で、20 世紀初頭まではエーゲ海地方への出稼ぎでも知られていた。
4	чершискана	*чл.* = чаршискана < чаршиски < чаршия < çarşı (T). 「市場の」。
6	бело момиче	= бяло момиче. бяло < бял は、民衆歌謡で女性、特に娘の美しさを表すエピセットとして用いられる。

10	очинки	< очинка *умал.* < око. -инка はロドピ方言に特有な指小接辞。вж. УРГ, стр. 14-15 и 55-56.
12	учинки	< очинки.
16	най	вж. РБЕ, т. 10, 'но.' 「しかし」。

言い寄ったのに、ていよくあしらわれて振られた男の恋の戯れ歌。この歌は、中部ロドピでヴァリアントが 10 曲ほど採録されている。男女の出会う場所は、多くがライコヴォとなっているが、СбНУ, кн. 39 に掲載の 1930 年代に採録された 3 つの歌（Стоин-1934, № 487-488 および Букорещлиев, № 282）では、テッサロニキとなっているのは興味ある。これらの 3 つ歌で主人公は、この町で（Стоин-1934, № 488 ではこの町のブルガリア人居住区で）ブルガリア人の娘に出会う[1]。

ライコヴォ村がエーゲ海沿岸への出稼ぎが盛んだった土地柄を考えると、貿易港を備えたこの大都市テッサロニキで働いていた仕立屋や石工など出稼ぎたちの戯れ歌が、1912-13 年のバルカン戦争や第 1 次大戦後に国境線が固定化されて出稼ぎが不可能になり、ライコヴォ村に舞台を移して歌い継がれたものと考えられる。この村は、かねてから、地場産業の中心でもあり、他の村から人びとの集まる機会も多かったので、そこからまた中部ロドピ各地にこの歌が広まったのだろう。

1. さらに Спасов, № 222-229 の歌と比較せよ。

9. Райковско бело момиче - II

1	загалих	*аор.* < загаля < галя. галя はロドピ方言では「愛する、可愛がる」の意味で 直前の標準語 залюбих と同義の語として用いられる。вж. РР, кн. 2.
2	смоленка	「スモリャン娘」< Смолян 「スモリャン市」。前掲歌の Райково の語注を参照。
3	йе	*мест. 3 л. ед. ж. вин.* = я < тя.
11	селем	= селям < selâm (T). вж. БЕР, т. 6.「挨拶」。
	дадах	= дадох. 標準語の -ох, -е 形のアオリストは、ロドピ方言では -ах, -е 型の変化をする。вж. ГСМС, стр. 53-54 и ГР, стр. 222-223.
12	йобръща	= обръща < обръщам.
14	река	ロドピ方言 рекам から形成されたアオリスト 3 人称単数形。対応の標準語 река と同じく、ロドピ方言でも рекам は第 1 変化動詞だが、ここでは第

		3 変化動詞に見られる -ах, -а 型の変化をしている。ロドピ方言ではこの語のアオリストは реках, рече, рече であるが、第 1 人称単数形 реках から、第 3 変化動詞のアオリスト変化に類推解釈されものかとも考えられる。この変化は、偶発的な現象で下位方言に特有のものとは考えられない。
18	йе	= аз.
	си	音節数の調節と強調の意味で用いられている。

前半の 6 行目までの部分とそれ以降の部分は整合性に欠け、本来、別の歌だったと考えられる。娘が、自分には許婚者がいるとして、若者の誘いをはねつけるヴァリアントはいくつか見られるが、それらも、前掲歌でも見たように恋の戯れ歌といった基調は変わらない。しかし、ここに掲載した採録歌のように、何が何でも結ばれようとする若者の思いつめた気持ちを歌った部分が付け加えられると、道ならぬ恋のシリアスな歌になる。

指輪は、キリスト教徒の場合もブルガリア・ムスリムの場合も、婚約には欠かせないものであった。若者のパートナーが決まり結婚の意志が固まると、彼の親族（多くの場合、姉か叔母）が、指輪をもって娘の家を訪ねた。この指輪を娘が受け取り、娘の側からも若者へ指輪が渡されると 2 人は半ば婚約した полузагодени ものとみなされ、その後、日を改めて十曜日に正式の婚約式が行われた [1]。このようにして婚約が成立し、その印として指輪をはめると、2 人はもっと頻繁に会うことが出来るようなるが、それも親族のいる場所でであって、2 人だけで会うことは認められなかった。特に婚約した娘には、さまざまな制約が課せられ、祭礼やポプレルカなどで行われる若者たちの集まりには以前のように出かけることが出来なくなった。また婚約相手の若者が羊飼いであると [2]、秋になって彼が冬営地に向かうときにも、見送りは家の扉口までに限られていた。指輪は、若い 2 人の人生階梯における位置を周囲の人びとに知らしめ、それによって彼らの行動を周囲からも規制してゆく社会的な印づけの役割を果たしていたといえる。その役割は、結婚が地域社会の関心事であり家族や個人だけの問題とはされていなかった第 1 次大戦以前の時代にあっては、はるかに大きなもので、だからこそ婚約の際に指輪は重要視されたのである。

テクストの結末に見られる娘の言葉は、民衆歌謡においては定型句化した表現である。そのことは、婚約と指輪の結びつき、その指輪が人びとの意識に想起させた社会的規制力を物語るものであり、定型句だからこそ人びとにリアリティをもって受け止められたのである。

---

1. Дечов-1968, стр. 376.

2. 羊飼いの若者の婚約中の振舞いについては、вж. Дечов-1968, стр. 377. さらに вж. Родопи, стр. 159.

10. Сестра си имаме, първо си любе нямаме

1	търнала	< търнам = тръгна. срв. РР, кн. 2.
3	Смилян	スモリャン市の南東 10km、ダヴィドコヴォ村の南西 25km に位置する村。下記の註解参照。
	госка	< гостка = гостенка. 「女性客」。вж. НГ, т. 1 и РР, кн. 2.
5	колко	反復される同一動詞のあいだに置かれて、動詞の表す動作の継続を強調する。вж. РБЕ, т. 7.
9	офчаре	*мн.* = овчари. ロドピ方言では、-ар, -тел などの語尾をもつ男性名詞は、複数形語尾 -е を取る。次行に見られる офчари は標準語の影響と考えられる。вж. ГСМС, стр. 35.
12	яла ми	命令法と共に用いられて「さあ」。 вж. НГ, т. 5.
	кажите	*пов.* = кажете. -и- を用いた中部ロドピ方言の命令法の形成については、вж. ГСМС, стр. 55.
15	първо си любе	първо любе は「最愛の人」の意味で、恋人びとにも妻あるいは夫をさす場合にも用いられる。

オスマン時代、スミリャン村は、中部ロドピ地方からクサンティやカヴァラなどエーゲ海沿岸へ通じる街道沿いに位置し、一帯で買い付けられた羊毛の集積地として知られていた。1912-1913 年のバルカン戦争後にブルガリア領になると、近隣の村から人びとが移住した。戦後、牧羊業が衰退してゆくと、タバコ栽培が盛んになった[1]。

スミリャン村が歌われている歌では、IV-F-18 歌などのように、村外の若者がこの村の恋人を訪ねてゆくとか、あるいは IV-K-6 歌のように若者がこの村の娘に言い寄ろうと出かけてゆくといった歌が、他にも数多く採録されているのは、上記のような歴史的背景から、この村が多くの近隣村と通婚圏を形成していたからと考えることができる。

羊飼いと娘の偶然の出会いを歌う恋歌として歌われたこの歌も、いくつかのヴァリアントでは、後半にまったく別の展開を見せている。1906 年生まれのブルガリア・ムスリムの男性から 1950 年に採録された НПСР, № 946 では、道に迷って森に入り込んだザハリンカが盗賊に捕まり、先に捕らえられて彼女に逃げろと叫んだ親戚のサリフが鉄砲で撃ち殺される。1955 年に 29 歳のキリスト教徒のブルガリア人女性から、ダヴィドコヴォの隣村ペトコヴォで採録された НПРК, № 447 では、私たちの採録歌とほぼ同じテクストに続けて、次ぎのように歌われる。

ти щеш със нази да дойдеш.	お前は俺たちと一緒に来るんだ。
— Борики тьонки, високи,	— ねえ、高く聳える細い松の木さん、
вий мень шахите да ми сте,	あんたたちは、あたしの目撃者よ、
шахите още испôте,	目撃者で、証人よ、
чи си ма Ахметь отбави.	アフメトがあたしを辱めたことのね。

私たちの採録テクストは、治安が安定して殺人や陵辱の場面が時代にそぐわなくなり、悲惨なこの部分が次第に歌われなくなって伝承されたものだと考えられる。

---

1. Юбилеен сборик, Българско село, София, 1931, стр. 185-186.

C. 幼い娘の恋

年上の若者に言い寄る幼い娘について歌った歌は、中部ロドピ地方で数多く採録されている。この項に掲載した採録歌についてみれば、キリスト教徒ブルガリア人からも採録されているが、多くはブルガリア・ムスリムのものである。

採録地ダヴィドコヴォ村の 70 歳前後の男女に尋ねてみると、かつては両親、特に父親が絶大な力をもっていて、結婚となると息子や娘たちは彼らの意図に従わざるを得なかったという。中部ロドピのモムチロフツィ村で長年司祭を務め、この村の婚姻慣行に通じていたコンスタンティン・カネフは、「若者を婚約させることは、両親の、特に母親の、権利でもあり義務でもあった。しばしば両親自らが直接娘の家に出かけて、婚約の交渉をした」[1] と記している。また、ダヴィドコヴォ村の近隣の共住村ペトコヴォ村では、ブルガリア・ムスリムの若者たちは「20 年ほど前（つまり 1940 年代中頃 ― 注：寺島）までは …、結婚や将来の連れ合いについて不安はなかった。父親が娘を選び、彼女の両親と婚約話をした」[2] という。しかし、そのことは、配偶者の選択に関して、若者や娘たちが皆、親まかせだったり、自由を持っていなかったことにはならない。

まず、パートナーの選択にかんして、未婚の男女でどのような差があったのか見ておこう。

少年は、広帯を巻くようになると成人に達したとみなされる[3]。以降、「若者 юнак」と呼ばれるようになり、聖ゲオルギの日やバイラム祭のホローやブランコ遊び、ポプレルカやメジェなど若い男女の集まる場所にでかけることが出来るようになる。結婚を目的としてパートナーを探すためである。

少女は、「初潮を迎えると成人女性と見なされ」[4]、「娘 девойка」と呼ばれて、若者と同じように上記の場所に出かけることができるようになる。しかし、このような機会は年に数度と限られている上に、その場所には陰に陽に年長者が関与しており、若者も娘も、彼らが子供として扱われていたときのように自由に出会うことは出来なくなる。若者たちの性は、以降、家庭内だけでなく、共同体からも管理を受けることになる[5]。

ともあれ、そこで若者と娘が知り合いお互いに関心や愛情を抱くと、若者は結婚の意志を両親に伝える。彼らの同意が得られると若者側から娘の家に使者が派遣され、娘の両親も同意すると婚約式が執り行われる。両親の合意は必須とされ、若者の選んだ娘に両親が反対すると、結婚は難しくなる。父親の意見は最終的な決定としての意味をもつ。若者は、親に反対されても意思を通そうとして、娘と合意の上で、形式的には「略奪婚」[6] という手段で、駆落ちにでることもある。また、若者がなかなか結婚の意思を示さないと、両親が嫁の世話を焼くことがしばしばだが、その場合でも、V-C-1 歌にも見られる

ように、若者は両親の提案を断ることも可能である。

若者は、このようにさまざまな方法で自らの意思を反映させることが出来たのに対し、娘の場合はずっと難しかった。まずもって、娘から若者に求愛や求婚をすることは、彼女たちの暮らす共同体では慣例ではなく、人びとからも良い目で見られなかった[7]。使者は、若者側から娘の側に派遣されるものであり、たとえ娘がどんなに若者を気に入っていても、逆はありえなかった[8]。そして、使者が家に来ても、カネフが幾例も記録しているように、当の娘は「大きな籠の後ろに隠れて黙っている」のがほとんどであった。もちろん、使者が帰った後で、娘の意向を問うことがあったが、19 世紀末の記録によると「今でも昔でも、娘の同意は婚約を成立させるための必要条件ではなかった。したがって娘の意向をただすといっても、実質的なものというよりは形式的なものでしかなかった」[9]という。

若者と娘のあいだに了解が出来ていて、その上で若者側からの結婚申し込みなら、事は比較的順調に運ぶ。しかし、若者側からの一方的な婚約申し込みも多く、娘の評判が高いと「村の多くの若者が嫁にと」話を持ってきた[10]。そのような場合、両親には娘の婿の選択肢が増えるために、彼らの意向がさらに強く働くことになる。一般に両親は娘の結婚に際して、若者の家系 сой や血筋 род を重視し、さらに相手の家の資産状態を考慮にいれたと言われる[11]。もちろん、なかなか縁談がこないと、娘の意向とはかかわりなしに両親が縁談をまとめることになった。また、親の欲得ずくでおこなわれる縁談も少なくなかった。親の意向に従った結婚が招いた不幸を嘆く歌は、「V. 家族、A. 母と娘」の項に見るように、私たちも数多く採録している。

そのような意に沿わない結婚を避けるために娘たちは、1）若者からの好意を受けても両親が納得しないと、合意の上で彼に「略奪」してもらう、いわば「駆落ち」とも言える手段にでるか、2）両親が娘の縁談をまとめる前に、当の本人は、先手を打って好意を抱いている若者の気を引くような行動にでて、これを両親に認めさせようとする。ここに項目を立てた「幼い娘の恋」も、後者のヴァリエーションである。

地域や時代によって差はあるが、19 世紀末から 20 世紀前半のロドピ地方では、女性は 15-16 歳が結婚適齢期と考えられ、その年頃で婚約して 20 歳前に結婚するのが一般的であった[12]。少女は初潮を迎えると成人女性とみなされ、「娘は未来のパートナーの選択を自由にすることができるように」[13]なった。当時のブルガリア人女性の初潮年齢は 12-13 歳頃といわれ[14]、両親、とくに母親が娘の縁談に本腰を入れるまでのわずか 2、3 年ほどのあいだが比較的「自由に」パートナーを選択できる期間であった。適齢期に近づけば近づくほど縁談に親が介入するようになって彼らの意向が反映され、意に染まぬお仕着せの結婚を押し付けられることになる。そのため、娘は何とかして自分で似合いのパートナーを探してきて、これを両親に認めさせようとする。

娘が早くからそのような行動にでると、ここに掲載した「幼い娘の恋」となる。そしてその幼さのゆえに、若者はしばしば他の女性に心を移すことになる。採録歌のヴァリアントを見てみると、ほとんどがブルガリア・ムスリムのものである。キリスト教徒の娘たちに比べて、彼女たちが早婚傾向にあって選択期間が短く、さらに両親の規制力も強かったためである。西ロドピ地方のチェピノ Чепино 村のブルガリア・ムスリムの女性は 12-13 歳で[15]、ストユ・シシコフの伝えるところによれば 10-12 歳[16]で結婚する場合も見られたという。この極端な場合には、娘の性的成熟は無視され、結婚はもっぱら両親の意図に任されることになる。娘があまりにも幼いと、彼女からの求愛に若者はまともに取り合わなかったことがしばしばだったろうことは、想像に難くない。

さらに結婚は、もう一方では生殖による労働力の再生産と、世代交代による労働力水準の維持という側面を持っていたために、村共同体では大きな年齢差が敬遠される傾向があり、これが若者の心理に影響を及ぼし、第 3 歌のような歌を生みだす一因にもなった。

---

1. Момчиловци, стр. 598.
2. Петково, стр. 114.
3. Солища, стр. 311. 広帯の記号的役割については、さらに Ганева, стр. 214-215 を参照。
4. РодНапр, год. 6, кн. 2, стр. 58 и Родопи, стр. 148.
5. Момчиловци, стр. 613.
6. 略奪婚については、後出 IV-F-19 歌の註解を参照。
7. вж. Родопи, стр. 150 и Чокманов-2, стр. 320.
8. Родопи, стр. 152.
9. Попконстантинов-1893, стр. 35.
10. Момчиловци, стр. 598.
11. Родопи, стр. 150.
12. Родопи, стр. 148.
13. РодНапр, год. 6, кн. 2, стр. 58. ここで言われている「自由」は、差っ引いて理解しなければならない。成人になると娘たちは特に親たちの咎め立てもなく祭日の催しやポプレルカなどに出かけることができるようになった、という意味であって、娘たちが主体的にパートナーの選択をして自分の意思を貫くことは難しかった。
14. Енциколпедия-1936, стр. 967.
15. СбНУ, кн. 7, стр. 43.
16. Родопи, стр. 148 に記載の Ст. Шишков の記録による。

1. Друга гали, мене мами - I

1	момиченце	*умал.* < момиче.
	малакичко	*умал.* < малко.　指小接尾辞 -ичко < -ичек を用いる中部ロドピ方言の形容詞については、УРГ, стр. 12-13 и 20-34 を参照。
2	глупавичко	この語は、先の малакичко と併用されて幼い娘を形容する決まり文句として用いられる。「幼くて、物知らず」の意味で、娘に持ち込まれた縁談を断る決まり文句としても用いられた。「家のはまだねんねで、者知らずだから момата, уж било още малко, че било глупаво, ...」と。вж. Апостолов, стр. 3.
7	йе	*мест. 1 л. ед. имен.* = аз. 中部ロドピ方言の代名詞の体系については、вж. ГСМС, стр. 45-46 и ГР, стр. 181-190.
	йе	*мест. 3 л. ед. ж. вин.* = я < тя. 前行の кърпа を受けている。この代名詞は単数形だが、ここでは копринена кърпа と памучена кърпа の両方をまとめて受けていると考えられる。
8	гали	< галям.　вж. РР, кн. 2. 中部ロドピ方言では「可愛がる」の意味。
11	хи	*мест. 3 л. ед. ж. дат.* = ѝ < тя.
13	пуи	= пои < поя.
14	те	*мест. 3 л. ед. ж. имен.* = тя.
15	ран	バジル босилек を形容するエピセットで、特に民衆歌謡で用いられる。ран は ранен（早咲きの）の意味で、他に дребен（小さな）、ситен（小粒な）などのエピセットも用いられる。習わしごとや儀礼では小さなバジルが好まれると言われ、上記のエピセットはその関連で使われるようになったものと考えられる。срв. Енциклопедия-БНМ, стр. 41.
18	да	過去形とともに用いて、現実とは反する事実を表す方言的な仮定用法。ГСМС, стр. 66 参照。
	по-височка	*умал.* < по-висока < висок.
20	по-черночка	*умал.* < по-чернока = по-черноока < черноок. 標準語では черноочка だが、ロドピ地方の民衆歌謡では通例、連続する同一母音 /o/ が縮約されて、母音一つの черночка の形で歌われる。черночка は「黒い目の」の意味で、「黒い目」は、この地方の民衆歌謡では美しい女性の条件の一つとなっている。

「どうして絹と木綿の2枚のスカーフを頭に巻いているのか」という問いかけに、娘は「思いの若者が別の娘を愛して、自分をだましているから」と答えているが、なぜ2枚のスカーフなのか、なぜ絹と

木綿なのかは不明である。あるインフォーマントによれば、木綿と絹という用途の異なる布地を一緒に被っていることが奇異であるという。

1920 年代頃までは、絹のスカーフは、婚約が成立したときに若者側から贈られる結納の品[1]として、あるいは出稼ぎに出た若者から婚約者への贈り物[2]としてもたらされるのが一般的であった。そのことからも想定されるように、ハレの時に用いられるべき絹のスカーフを、日常用の木綿のスカーフと併用することが奇異であり、娘の心理状態を表していると推察される。また上記の事を念頭に置くなら、娘のかぶっている絹のスカーフは若者からの贈り物で、彼女と若者の間には恋愛感情なり、婚約関係が成立していたとも想定される。

しかし、若者には別の「適齢期の」娘が現れたために、彼はこの幼い娘に「もう少し背が高かったら、もう少し目が黒かったら」と告げ、彼女の求愛を退ける。この地方の民衆歌謡では「細身で、背が高く、黒い瞳 тьонка снажка, висока, черноочка」の娘が理想として歌われるが、テクストの「もう少し背が高かったら」という表現には娘の幼さを読み取ることができ、それが、さらに момиченце малакичко「ちっちゃなお嬢ちゃん」という、名詞と形容詞のどちらも、指小形からさらに指小形を派生させた形を合わせ用いることで、その幼さが強調されていると考えられる。

歌い手によると、バジルは芳香を放つので、かつて娘たちは胸元に刺して香水代わりにしていたが、若者にたいする愛の告白の手段としてよく使われ、鏡も、今と比べて値の張る品物だったので娘への贈物となったという。若者は、この鏡を他の娘に渡すことで、主人公の娘の求愛を退けたのである。

---

1. Петково, стр. 114 и Чокманово-2, стр. 321.
2. Дечов-1968, стр. 377.

2. Друга гали, мене мами - II

24	карар	НПСР, стр. 532 は、この語を точно, колкото трябва「必要なちょうどそれだけ」と説明している。< karar (T). 娘は、身長や目の黒さなど「彼が求めるだけのものは」備えていると主張する。

前掲歌の 2 日前に同一の歌い手が歌ったヴァリアント。歌の基本的な内容はほぼ同じだが、最後の部分で、主人公の幼い娘が若者への思いを断ち切るように捨て台詞するのが面白い。

3. Фесче не можеш да кривиш

1	гори	*пов.* < горем = горя.　ここでは自動詞として用いられている。
4	нийде	< нигде = никъде.　вж. БЕР, т. 4.
5	зам	зам は前置詞 за に起源するが、ここでは、副詞として用いられている。この用法はロドピ方言に特有で、НПРК, стр. 964 では'затова'と説明されている。方言解説を参照。
6	джанъм	ここでは、頼みごとをするときに添える間投詞として用いられている。< canım (T). вж. РБЕ, т. 4.
7	челъм	< чалъм. РР, кн. 2 でこの語は 'надуване, гордеене, пъчене.'と解釈されている。若者は娘の前で「見得を張った」のである。お前なんか相手にしていられるかいと。< çalım (T).
9	йекрана	< екран. 採録地のインフォーマントによれば、「似合いの者」の意味。< akran (T).　вж. Redhouse, 'equal in age or rank.'
11	фесче	*умал.* < фес. < fes (T). フェス帽、いわゆるトルコ帽子。フェス帽については、IV-E-1 歌の註解を参照。
12	риска	< ризка. 中部ロドピ地方のブルガリア・ムスリム女性は、祭りなどの盛装の際にジャンパースカート状の ризка を身につけ、その上から赤地に黒の格子模様の前掛けをつける。
	кошкаш	< кошкам. РР, кн. 2.　ризка を「ふわりとさせる」動作を кошкам の語で表しているのである。< кош 「（大型の）籠」。

若者に振られた娘の捨て台詞。「お前はフェス帽子をはすにできないし、スカートに風をはらませてふわりとさせることも出来ない」理由を、若者は ти си още малка「お前はまだ小さいから」と説明する。このような婀娜なしぐさもできないうぶな娘は恋の相手にするには幼すぎると、若者は娘の求愛を退けたのである。

この地方のブルガリア・ムスリムの女性は、民族衣装で正装する際に、フェス帽子をかぶり、その上からスカーフをかける [1]。インフォーマントによれば、フェス帽をあだにかぶるしぐさは、若い男性の前で相手の関心を引くためにおこなわれたという。

---

1. Петково, стр. 95-96.

4. Аз съм мома за галене

1	излели	= излезли. この地方では 、標準語の-л'аз- の語根を持つ動詞のアオリスト能動分詞は短縮語根 -л'а-から形成される。 вж. ГР, стр. 254.
2	ъгълън	*чл.* < ъгъл / агъл < ağıl (T). вж. РР, кн. 2. 「家畜の囲い」。牧畜にかかわるロドピ方言特有のこの意味は、戦後生まれの若い世代には不分明になってきており、彼らはこれを標準語の「すみ、かど」と理解している。レアリアの変化にともなって起こった、歌詞のちいさな再解釈の一例である。
	байреман	*чл.* < байрем. срв. НПСР, стр. 527.「バイラム祭の会場」。
4	пазароват	< пазаровам. この地方では外来語から動詞を派生させるのに-овам が用いられる。вж. ГР, стр. 217.
8	йе	*мест. 1 л. ед. имен.* < я = аз.

バイラム祭に限らず、一般に祭りの会場には種子、農具、家庭用品などを売る露天が立ち、季節によっては家畜市も開かれた。農村部では人口が希薄で自給率も高く、店舗に常備して販売するほどの需要のない商品や行商に向かない商品は、このような場所で取引された。祭礼に伴う露天市は、年に数度と限られていたために、多くの人が集まった。都市の定期市には、刈り取りや耕作の季節労働、あるいは家事手伝いなどの職を求める女性も集まった。中部ロドピ地方では、このような定期市に自らを売りに出かける娘のことを歌った歌が採録されている。例えば、НПРК と НПСР には、1950 年代中葉から 60 年代初頭にかけて採録されたものが 8 つ掲載されている。それらの掲載歌は、興味あることに、一例を除いてすべてがブルガリア・ムスリム（ポマク）のものである。

何人かのインフォーマントは、かつては花嫁が金銭で売買されたとの話を聞いたことがあるというが、その詳細は知られていないし、管見ではロドピ地方の地方誌にもこれに関する記述がない。

しかし、この地方では、子供の食事も事欠いたり借財に追われて妻を売るという歌がいくつか伝えられている[1]。また、とらわれの身の兄をあがなうために自らの身を売りにゆく妹の歌も採録されている[2]。私たちの採録歌 IV-G-5 にも、それをうかがわせる歌詞がある。レスコヴォ村 Лесково で 1959 年に採録された НПРК, № 1168 では、娘が自分で身売りに行くとはっきり歌われている。

—Майри момиче хубава,	「ねえ、綺麗な娘さん、
къде си сама търнала ?	一人でどこへお出かけかい？」
— Търнала си съм сам-сама	「あたしは一人で出かけ、

на женски пазар да ида, (2)	行く先は女の市場、
сам-сама да се продавам.	この身を自分で売りに行くのよ」
— Майри момиче хубаво,	「ねえ、綺麗な娘さん、
колко е тебе пахона ?	お前の値段はいくらかい？」
— Мойта е паха йевтина:	「あたしの値段は安いわよ、
хиляда желти ялтъне, (2)	黄金の金貨千枚、
шинеци бяли грошове.	白金の銀貨二、三樽」

娘が身売りに行く市場が明示されているヴァリアントもいくつかある。どれもエーゲ海沿岸の都市で、ほとんどがコモティニ Komotini (Κομοτηνή、トルコ語名 Gümülcine、ブルガリア語名 Гюмюрджина) とされている。この町の近隣一帯は、かつて中部ロドピ地方の羊飼いたちが冬営地として大規模な羊の群れをおろしていた地域として知られる [3]。これらの記録と上に引いたヴァリアントを念頭に置くと、私たちの採録歌で歌われている市場もコモティニであったかも知れない。

そんな市場に、まるで生活必需品でも買うように娘を求めにやって来た羊飼いに、幼い娘は切り返す。あたしは、色も恋もある生身の娘だよと。

---

1. 例えば、Вулджев, № 334-337 および НПСР, № 712-715 など。Стоин-1934, № 263 では、娘はトルコ人に略奪され、ロマ（ジプシー）に売られる。

2. НПСР, № 762. НПСР, № 913 では、スミリャンの娘がギュムルジナの市場に自分で身売りに出かけるが、その理由は歌われていない。市場につくと、娘は若者のハイドゥティンに買い取られる。彼が、娘を近くによんで可愛がろうとすると、血の露が下り木と石が降ってくる。不思議に思って若者が娘に問いただすと、娘は若者の妹だとわかる。この歌では、若者は、夫婦か愛人かはわからぬが、娘と何らかの性的関係を前提に売買関係を結んでいることがうかがわれる。

3. Момчиловци, стр. 238-247 および Петково, стр. 28-30 などを参照。

D. 両親と恋する娘・息子たち

前項でも見たように、結婚となると両親が絶大な力を握っていて、息子や娘たちは彼らの意図に従わざるを得なかったといわれる。

中部ロドピ地方では、男たちは羊飼いや石工、大工、仕立屋として出稼ぎを主たる生業にしていたために、夫の不在時に娘に縁談が持ち込まれると、母親がこの問題を処理した。しかし、父親のいるときでも、母親が婿の選択にしばしば決定的な役割を果たした。母親は、村に常住し、村びとたちや彼らの家庭状態を父親よりも良く把握していたので、意見の食い違いが起こっても彼女の言葉が説得力をもったからである[1]。

結婚問題のみならず、一般に、母親は、家族内の問題解決のプロセスを把握し、決定をコントロールしていたのに対し、父親は、家長として最終的な判断をくだす立場にあった。父親は、母親の出す解決策に沿って認可を与えるだけの、絶対的ではあるが象徴的な役割しか担っていない場合も少なくなかった。そのため、娘が思い通りの結婚をしようとすると、母親を納得させるか、母親の協力を得ることがきわめて重要であった。母親は、好ましからざる若者と恋に陥らないかと娘に監視の目を向け、時には娘の意図に逆らって結婚を阻みもする大きな障害ともなったからである。母親との関係がうまく行かないと、娘は彼女に対して敵意すら抱くことがあった。採録歌は、この種の恋の歌の通例どおり、若者たち、特に娘たちが主人公であり、そこには、親たち、特に母親に対する彼ら、彼女たちの辛辣な目が現れている。

---

1. Чокманово-2, стр. 254.

1. Стигни го, майчо, питай го

2	кина	= какво. ロドピ方言のこの疑問詞は不変化でモノや人に用いられる。
5	копеле	вж. PP, кн. 2. 標準語では「庶子」、さらに若者にたいする軽蔑的な名称で用いられる。しかし、この地方の方言では蔑称的な意味合いはなく、愛称的に момче「若者」の意味で用いられる。
8	сино	= синьо < син. 「青い」。

13	са каже	= се каже < кажа се / казвам се. 「自らの身分や状態を明らかにする」の意味で用いるこの用法は、古風な表現で方言的。ロドピ地方の民衆歌謡でよく用いられ、私たちの採録歌 I-1 にも見られる。
15	лефтеро	< лефтер. 「独身の」< ἐλεύθερος (ModGr).

よそから来た白い肌で黒い瞳の理想の若者。青い鞍をつけた灰色の馬にまたがって、緋色の服を身にまとい、鳥のようにかけぬけて行く。描写を単純化して色彩を強調し、若者のイメージを浮かび上がらせる手法は、聞き手の感覚に直截に訴えかける。スピード感のある描写は、一瞬にして若者のとりこになった娘の心の動きにも呼応している。夢中になった娘は、どうしても彼と結ばれたいから、結婚していたら別れ薬を使って分かれさせてくれと母親にせがむ。

ブルガリア・ムスリムの歌ったヴァリアントが、スモリャンの西約 20km に位置するムグラ Мугла 村で 1928 年に採録されている[1]。その時代のロドピ地方では、例えば K. カネフの記録によると、モムチロフツィ村で離婚は 1910 年に 1 件、次に 1920 年に 1 件と 2 例しかなく、その 2 件とも村では大きなスキャンダルになったという[2]。離婚に対して、村びとは極めて厳しい目を向けていた。

そんな村びと目も気にせずにはしゃぐ娘の振る舞いは、コミカルですらある。この美丈夫の若者が村の外からきたまれ人であるからこそ、そのような行動も歌に歌うことができるのである。

娘の求めた別れ薬の薬草は、テクストに名前があげられていないが、メリロート комунига、ニガヨモギ вратига、リンドウ тинтява を調合したものがこの地方では良く知られている。この薬草は、煎じた液をかけたり、乾燥したものをいぶしたりして用い、人だけでなく妖精のサモヴィラや龍に惚れられた男や女を別れさせる効能をもつとされ、秘薬として民衆歌謡でしばしば歌われている[3]。

---

1. Кацарова, № 62.
2. Момчиловци, стр. 654.
3. 恋の魔術については、さらに IV-I-3 歌の註解を参照。

2. Дохадай, любе, дохадай

1	дохадай	*повел.* < дохадам. 「やって来る」。主にブルガリア・ムスリムの用いるこの多回体動詞については、вж. ГСМС, стр. 57 и РР, кн. 2.
2	денен	*чл.* < ден. 第 4 行目の неделкана と対照的に「平日」の意味で用いられ

		ている。この地方では後置冠詞形 денън / денон が一般的だが、ここでは語末の軟音性が意識されて денен となっている。 срв. кон ~ конен, път ~ пътен. вж. ГСМС, стр. 40 и ГР, стр. 161-162.
	дваш	= дваж.
	триш	= триж.
4	неделкана	*чл.* < неделка. *умал.* < неделя. 「日曜日」。 вж. РБЕ, т. 10.
8	лика	вж. РБЕ, т. 8. 「相応しい相手」。民衆歌謡では лика-прилика の語呂合わせの慣用句で「お似合いの」カップルの意味で用いられる。下記の註解を参照。
	прелика	прилика と混同されている。この地方では、/е/ > /и/ の母音変化がしばしば観察されるために、このような混同が頻繁に生ずる。もちろん「お似合い」の意味の прилика が正しい。
10	иглика	「桜草」。定型句における用法については、下記の註解参照。

末尾の 8-10 行に見られる че сме си лилка прилика / като два стрълка иглика は、/и/、/л/を反復させて韻も踏んで語呂もよく、「お似合いの」恋人たちの意味で定型句として広く中部ロドピ地方から南東ブルガリア一帯の民衆歌謡で広くに用いられている。たとえば、СбНУ, кн. 10, 1894, стр. 28 に掲載された黒海沿岸のブルガス地方の歌では、

Двамътъ дъ се земеме,	ぼくら二人は結婚しようよ、
Двамътъ ние със тебъ,	ぼくら二人、君とぼくは、
Че си сме ликъ преликъ,	お似合いだから、
Къту бусилек ф гръдинкъ,	庭のバジルのように、
Къту два стръкъ игликъ.	桜草の二本の茎のようにね。

と歌われる。

お気に入りの若者の心を射止めた娘は、両親から意に沿わぬ結婚を強いられないようにと必死である。彼を両親に引き合わせるから、彼らが折れて結婚に同意するまで、何度も家を訪ねてきてくれと若者に頼む。結婚に決定権を持つ親にたいする娘の側からのタクティクスである。

この地方の慣習を知る者には、上記のようなテクストの内容は奇異に感じられる。娘や若者が自分たちはお似合いのカップルだうわさを立てるように仕向け、両親に 2 人の仲を認めさせるという例は認められるが、若者が娘の家に訪問を許されるのは婚約が成立した後のことであって、採録地の隣村ペトコヴォ村では、「婚約後、許婚者の若者は、週に 1 度か 2 度、娘の家にお客に行くことができるようにな

る。しかし1人ではだめで、誰か親戚の人か、でなければ誰か親しい友人と一緒でなければならなかった」[1]という。この記録は19世紀末のものだが、ほぼ60年後の同村の記録でも、娘の家への訪問は婚約後のこととされている[2]。

これまでに出版された数種類のロドピ地方民衆歌謡集を調べてみると、似合いのカップルを歌った8行目以下の定型句の含まれる歌は、多くあるが、1-7行目までの内容を含むヴァリアントは、ダヴィドコヴォ村の西約20kmに位置するチェペラーレで1954年に採録されたНПСР, № 582の1例のみである。この歌は、後半部分が、もし両親が結婚を許してくれなかったらソフィアに駆け落ちしようという内容で、私たちの採録歌とは別の展開になっている。

いずれにせよ、前半部分はこの地方の伝承歌には見られない発想であり、北ブルガリアからもたらされたものが伝統的な定型句に接木されて生まれたものかもしれない。この歌の成立時期は特定できないが、北ブルガリアの歌の影響を強く受けているとしたら、第1次世界大戦を経てブルガリアとギリシアの国境線がほぼ今の線で確定され、エーゲ海地方への移牧や出稼ぎが難しくなって産業構造が転換し、ブルガリア内陸部との結びつきが強くなってくる1930年代以降の可能性が高い。ロドピ地方の民衆歌謡の生成と発展を知ることのできる興味ある歌である。

---

1. СбНУ, кн. 9, стр. 36.

2. Петково, стр. 109.

3. Дай си ме, майчо, на нашето комшийче

1	ма	*мест. 1 л. ед. вин.* = ме.
2	нашно	*чл.* = нашето < наш. 音節数の調節のために、語末の後置冠詞の中性形 -но を残し、所有代名詞本体の中性をあらわす -е を省略したもの。民衆歌謡では、この種の省略方法が地域を問わず広く認められる。
	близно	< близен. вж. РБЕ, т. 1. 「近い」。標準語では близко < близък.
4	дарън	*чл.* < дар. ここでは дар は集合名詞として用いられている。
5	валъ	< вала < vala (T).「スカーフ」。インフォーマントは、この語は、通常の「スカーフ кърпа」とは異なって、特に копринено шалче「絹の薄手のスカーフ」を指すという。 срв. БЕР, т. 1.
6	тирви	< тирв < тире. < tire (T). インフォーマントは тирви ръкави を

		бродирани ръкави、つまり「刺繍のついた袖」と説明。срв. РЧД.
7	кундри лескати	вж. PP, кн. 2. 「エナメルの靴」。IV-E-1 歌の註解を参照。
8	аглък	< yağlık (T). вж. PP, кн. 2.「手製のタオル、手拭」。
	развърнат	< разврящам. PP, кн. 2.「（結納の）お返しをする」。

この地方では、贈り物を表すのに以下のような言葉が用いられる。

1）ニシャン нишан は、婚約式の時に花婿側から花嫁側に贈られる儀礼的な贈り物の意味で用いられる。これは、トルコ語 nişan を経由してペルシア語にさかのぼる言葉で、本来は「印」を意味する。婚約成立の「印」として贈られたからである。婚約式には、結婚の意思を確認する小婚約 малък годеж と結婚式の日取りなど詳細を決める大婚約 голям годеш があるが、ニシャンもこれに応じて小ニシャン малък нишан（小結納）と大ニシャン голям нишан（大結納）がある。小ニシャンには、柘植あるいはバジルの花束にハンカチを巻いて赤い糸で結びこれに金貨や銀貨などの貨幣を結びつけたものが用いられる [1]。大ニシャンには、上記の花束のほかに、金あるいは銀の婚約指輪とさまざまなアクセサリー類が贈られる [2]。一般に、これも含めてニシャンと呼ばれる。

2）アルマガン армаган は、トルコ語 armagan に由来する語で、冬営地や出稼ぎから戻った村びとや遠来の客が持ってくる贈り物で、家族や親戚、友人たちに贈るものだけでなく、許婚者の娘に若者が贈る贈り物もこの語で表される。都会風の装飾品やエーゲ海沿岸地方の乾果物がその定番であった。

3）ダール дар という言葉は、贈り物をあらわす一般的な言葉だが、婚姻との関連で用いられると、ロドピ地方でもブルガリアの他の地方と同様に、結婚式の際に花嫁側から来賓に贈られる儀礼的な贈り物を意味する。

若い男女間の贈り物は、婚約から結婚にいたる過程でほぼ上記のような段階を踏むが、テクストで用いられているダールは上記の意味ではなく、「婚約前の男女が交わす贈り物」の意味で用いられている。4 行目以下の歌詞はほぼ定句化しているが、НПСР で確認できるヴァリアントのこの定型句にあらわれる贈り物を検討してみると、

出典	採録年	男性側	女性側
НПСР № 315	1939	乾葡萄、指輪	黒い瞳、袖刺繍つきのシャツ
НПСР № 336	1952	乾葡萄、指輪	黒い瞳、細身の胴体
НПСР № 590	1952	乾イチジク、乾葡萄、金糸銀糸、絹	黒い瞳、西瓜のような赤い頬
本テクスト	2003	赤いヴェール、エナメル靴	袖刺繍つきのシャツ、ハンカチ

となる。男性側の贈り物には、上述のアルマガンに属するものの他に、指輪や絹といった婚約の際に交わされる品も含まれている。それに対し、女性からは、黒い瞳、細身の胴体、赤い頬といった彼女自身の身体表現による反応が返されている。眼差が愛情表現で果たす役割は、「B. 出会い」で論じたが、女性側の贈り物からは、眼差による非接触的な愛情表現だけでなく、袖刺繍つきのシャツなど、本来は婚約が成立してから贈られる品物も含まれている。

ところで、19 世紀末のペトコヴォ村の記録では、若い 2 人が互いに好意を抱いていることが人に知られると、娘たちが集まって彼らのために特別の歌を歌った。この歌は、若者たちのあいだでカップルにたいする認可と合意の機能を果たしており、以降、この 2 人は、村のなかでも「以前よりは少しは自由に振舞うことができるようになり」[3]、花束などちょっとした物をやり取りすることができるようになった[4]。

採録歌は、このような段階にあるカップルが歌われている。第 1 次大戦以前の頃なら、この段階ではまだ若者の両親が 2 人の仲に直接関与しておらず、若者の口から、あるいは周囲のうわさから若者と娘の関係を知って初めて、両親は求婚の是非や準備に取りかかった。

しかし、テクストに見られるダール дар という語の用法や交わされた贈り物には、以前なら婚約式で交わされるものや結婚を前提としたものも含まれており、娘がこの贈り物の交換をすでに済ませていることを理由に、若者のところへ嫁がせてくれと懇願している。1952 年にシロカ・ラカ Широка лъка で採録されたヴァリアント НПСР № 590 でも同様の展開が見られる。このヴァリアントでは、次のように歌われる。

неи са снощи ходили	あの娘のところには昨日の晩、
дваж дванадесте момàре.	二度も十二人の使者が行ったんだよ。
На врют е нишѐн вôрнала,	[でもあの娘は]みんなに結納を突き返したんだよ、
та тебе ли ще да зьôме ?	お前を婿にするかね？」
— Зьô ма ща, майчу, зьô ма ща,	「俺を婿にするよ、ねえ母さん、俺を婿にするよ、
тà хи е за мен вòрнала.	あの娘は俺のためにやつら仲人を突っ返したんだ。
Ний са сме с нея сбирали	俺はあの娘とデートして、
и са сме дарê дарили:	贈り物を交わしたんだ、
ê неê — смокви, стафиди,	俺はあの娘に、イチジクと乾葡萄を、
тя мене — чьôрни очинки,	あの娘は俺に、黒い瞳を
ê неê — сърма, коприна,	俺はあの娘に、金糸銀糸と絹の布地を、
тя мене — бузки-карỳзки.	あの娘は俺に、西瓜の赤い頬を。

息子の求めに不安を抱く母親に対して、彼は、もう дарê、つまりダール －結婚の約束の品－ を交わしているからと、この贈り物を根拠に娘との婚約を進めてくれと求めているである。他のヴァリアントからも理解されるように、カップルの交際を認めて仲間の娘たちの歌う歌や、2 人が婚約以前に交わすダールの交換には、慣習法的な規制力が働いており、母親としてもそれを無視できなかったのである。時代が下って、娘仲間や若者たちの意見が重視されるようになっていた証左とみることができるかもしれない。

---

1. Родопи, стр. 154.
2. Родопи, стр. 156-157.
3. СбНУ, кн. 9, стр. 31-32.
4. Родопи, стр. 151.

4. Стара майка не се лъже

1	Фатмиш	*умал.* < Фатма.　-иш はトルコ語の指小接尾辞-iş < -ş に由来。
2	оти	< ὅτι (Gr).　вж. PP, кн. 2. 「なぜ、どうして」。
	са	*възвр. мест. вин.* = се.
4	мътничка	< мътнички.　*умал.* < мътен.
6	чеках	= чаках.　標準ブルガリア語と異なって、ロドピ方言では ж. ч. ш は常に軟子音として発音されるために、後続の母音に a > e の変化が起きる。вж. ГСМС, стр. 29-30.
8	са … лъже	普遍的事実の伝達や格言で用いられる се 動詞の 3 人称単数形。вж. ГСБКЕ, т. 2, стр. 256, б.　ロドピ方言に特有なce動詞のこの位置については方言解説を参照。
11	очинки	*мн. умал.* < око. вж. УРГ, стр. 56.
12	бускине	*чл.* = бузкине < бузки.　*умал.* < буза.
	хапани	< хапан < хапя.　хапя бузки は、文字通りには「頬を噛む」の意味。この求愛行動については、V-A-6 歌と比較。

「B. 出会い」の解説でも見たように、結婚年齢に達した男女が、恋愛感情をはぐくむ最初の場所の一つが水場であった。例えば、中部ロドピのオレホヴォ村 Орехово では、若者たちは泉や水場で思い

の娘たちを待ちうけ、彼女の汲んだ水を桶から飲ませてくれるように所望した。娘が若者に同意して水を与えると、若者はこれを好意の印と見なして、娘の両親に婚約の使者をつかわす大きなきっかけにした。この慣わしは、1940 年代頃まであったという[1]。

日にちや季節が決まっていて回数も少ない祭日やメジェ（共同労働）と異なって、水場での出会いは、放牧や農作業などの日常作業の合間をみて行われるだけに、頻繁に行われた。祭日などで 2 人が知り合うと、「水場でのデートはもっと頻繁に行われるようになる。娘は鍋を持って水汲みに行くと、若者は家畜に水を飲ませたり、羊を放牧に出したりする。若者は、娘がスカーフに挿した花束をひそかにさっと盗み取ったり、鍋をつついて水をこぼしたりする。また、水の中に砂や石を放り込んで、新しい水を汲まなければならないように仕向ける。それはみな、若者が、惚れた娘ともっと長く一緒にいたいので、彼女の仕事を遅れさせようとした」[2]ためであった。

これは、もちろん親に秘密で行われた。また娘たちは、ことが彼らに知られるのを恐れて、同年代の姉妹や従姉妹にはなかなか打ち明けなかった。しかし、親は、娘の素振りを目ざとく察知した。泉の水が濁っていたから澄むまで待ったというのは、そんな親に対して用いられる決まりきった口実で、多くのヴァリエーションが歌われている。

年長者による規制と管理のもとに置かれていた公的な祭日やメジェの場合とは対照的に、このように水場では、からかいや戯れなど私的で情動的な振る舞いが、半ば黙認される形で許される機会が見られたのは注目に値する。ロドピ地方では、これは新しい現われであった[3]。「B. 出会い」の解説でもすでに見たように、バルカン戦争や第 1 次世界大戦を経てブルガリアとギリシアの間で国境が画定され管理が一段と強化されるにしたがって、移牧や出稼ぎなどの移動労働が衰退して[4]、近距離放牧やタバコなどの園芸作物が普及して[5]、若者たちが村に定住するようになり、娘たちと日常的に接する機会が増えたからである。さらに、しばしば指摘されているように、この時代になると、結婚式は村を挙げての行事から、個人を中心としたものに変わり、若者たちの意思がすこしずつ尊重されるようなったのも、水場でのインチームな交際が広まる一因であったと考えられる。

---

1. Орехово, стр. 294-295.
2. Солище, стр. 317.
3. Турян, стр. 222.
4. Вакарелски-1977, стр. 134 などを参照。
5. Петково, стр. 27 и Чокманов-2, стр. 362.

5. Стара майка, първа касканджийка - I

2	глупаво	< глупав.　IV-C-1 歌の語注を参照。
3	кърши	вж. БЕР, т. 3 и РР, кн. 2.　ロドピ地方では насреща, срещу の意味で用いられる。< karşı (T).
5	лудо	< луд. 中性形が млад и буен човек の意味で名詞として用いられている。луд は「狂気じみた、狂った」という意味だが、民衆歌謡では、通常、若者に用いて「心の内から湧き上る自分でコントロールできない鬱勃たる」生命力を形容するのに用いられる。ここでは、娘を形容する前出の глупаво と対照的に用いられている。
6	кайно	вж. РР, кн. 2.　ロドピ地方で както の意味で用いられる。
8	е	*мест. 1 л. ед. имен.* < я = аз.　вж. ГСМС, стр. 45.
	е ей ней за тебе	インフォーマントの説明では、'аз така за тебе'の意味。ей ней についてはさらに вж. НПРК, стр. 963. = е тъй, така.'
10	енна	< една.　ロドピ方言に良く見られるこの音変化については、вж. БД, стр. 217 и ГСМС, стр. 33.
12	касканджийка	срв. РР, кн. 2. = къскънджийка,「焼餅焼きの女」。< kıskandcı (T).
17	те	*мест. 3 л. ед. ж. имен.* < тя. 次に掲載するヴァリアントの相当個所と比較。一般に、中部ロドピ方言では人称代名詞 3 人称単数女性主格形は та が用いられるが、採録地ダヴィドコヴォ村から 20km ほど南の鉱山都市マダン Мадан やルドゼム Рудозем からギリシアとの国境地帯までの地域では tê が用いられる。вж. БДА, т. 3, ч. 2, стр. 143-144. 14-15 行目では標準語形の тя が用いられて、その使用が揺れている。
	дава	< давам.　вж. РБЕ, т. 3,「許す、認める」。
18	идам	вж. РР, кн. 2. = ида.
20	са зберам	= се сбера.
23	да не пиша	否定形では意味が通らない。歌い手の誤解か。НПСР, № 400 に掲載のヴァリアントでは. 'да напиша' となっている。

この地方の民衆歌謡で母親は、1）娘の恋を助ける者、2）娘の恋を妨げる者としての両面で歌われる。後者の場合、母親は監督者、管理者としての役割が強調され、娘の許婚者を決めるのも彼女である。母親の関心は娘の嫁ぎ先の社会的地位や夫になる人の財産にあり、そのため娘の意に添わない結婚を強いて、夫婦関係というものを理解できない未熟な夫を嘆く歌や、小柄な醜男に連れ添った不満をぶちまける歌に見られるような不幸なカップルを生むことになる。

テクストの場合、娘の母親は継母だけに、2）の側面はさらに大きくなる。娘が好ましからざる恋に陥らないようにと一挙手一投足を監視する継母は、娘からすると「（村）一番の焼餅焼き първа касканджийка」と見える。そんな継母に行動の自由をがんじがらめにされて出口なしの娘の言葉には、さらに進むと、次に掲載する歌のように自暴自棄の響きすら聞こえてくる。

この歌の末尾には「恋文」が歌われているが、これは学校教育が一般化して識字率が上昇してくる20世紀以降のことである。恋文も、花束同様に、直接本人に渡すことはせず、水場のような「公的ではない」出会いの場所で、人の手を介して渡された[1]。しばしばその仲介役を果たしたのが、水汲み仲間の娘であったといわれる。彼女たちが娘組を形成していたのかインフォーマントに尋ねてみると、水場に集まるおしゃべり仲間はあったが、特に娘組のような組織は存在しなかったという。しかし、水場での娘たちの議論や評価が恋の行方を大きく左右しただろうことは想像に難くない。

---

1. Родопи, стр. 151.

6. Стара майка, първа касканджийка - II

2	хем	接続詞 и の意味で用いられている。< hem (T).
3	срещу	1950年代以前にこの地方で採録された民衆歌謡では、карши / кърши < karsi (T) が一般的。срещу が用いられているのは、マスメディアや学校教育による標準語普及の影響と思われる。
7	какно	= кайно.　вж. PP, кн. 2.　主に中部ロドピ地方で用いられる。
8	йе	*мест. 1 л. ед. имен.* < я = аз.
12	те	*мест. 3 л. ед. ж. имен.* < тя. 前掲歌の17行目の語注を参照。
	йе	*3 л. ед.* < съм = е.
13	та	*мест. 3 л. ед. ж. имен.* < тя.

前掲歌のヴァリアントだが、以下の点で大きく異なる。継母にがんじがらめになった娘は、「お前に恋焦がれている изгорех за тебе」と言う若者の言葉を受けて、最後の部分で「あたしたちが焼き尽きてしまうほど身を焦がしなさいよ。/ そしてあたしたちは乾いた灰になりましょうよ гори да изгорим / сух пепел да станем」と歌う。この発想は、изгорех ~ гори ~ изгорим という一連の言葉の2つの意味の「恋い焦がれる」と「焼く」を、意図的に絡ませることで、同根語を用いた言葉遊びとして引き

出されたものだが、そこには出口の見えない娘の心情も映し出されている。この状況から飛躍すると、若い2人は、駆け落ちという行動に出ることになる。

7. Къде е, севде, майка ти - I

1	йе	*3 л. ед.* = е < съм.
2	нема	= няма.
	йе	*мест. 3 л. ед. ж. вин.* = я < тя. вж. ГР, стр. 186 и БДА, т. 1, ч. 2, стр. 118. ダヴィドコヴォ村一帯では、йе が一般的に用いられる。
3	мойна	< мояна = моята.
6	черни череше	= черни череши. 文字通りには「黒いサクランボ」。通常は「赤 червен」と形容される名詞でも、深みのある濃い「赤」を民衆歌謡ではしばしば「黒 черен」と形容することがある。色の濃いアメリカン・チェリー・タイプのサクランボは вишня で、череш とは別物。
12	не	= ние. вж. ГСМС, стр. 45 и ГР, стр. 186. н'е は古形で、次に н'ий が出現し、ほぼ標準語と同じ н'ийе がもっとも新しい形である。

好きあった2人の結婚に立ちはだかる母親にたいする本音が、彼女のいないところでポロリと出た様子をコミカルに歌った歌。ヴァリアントは、ほとんどがブルガリア・ムスリム（ポマク）のもので、その数も少なく、流布する地域も中部ロドピの一部の地域に限られている。そのなかで、ダヴィドコヴォ村から15kmほど南に位置するヴァルビナ Върбина 村で採録されたヴァリアント НПСР, № 580 は、母親だけでなく父親についても歌う。

母親は高い山に緑の牧草を乾しに行ったという娘の言葉を受けて、若者は次のように答え、

— Дано ê мечка изêде,	「彼女（母親）が熊に喰われて
назад да са не завôрне,	戻ってこなかったら、
ний с тебе да са зьôмеме.	ぼくと君は結婚できるのにね」

父親は緑の牧草地に真っ赤な桜ん坊を集めに行ったという娘の言葉には、

— Дано са вейка прекôрши,	「枝が折れて、
бàйко ти да са отвôрши,	君の父さん、一巻の終わりになれば、

ний с тебе да са зьôмеме.　　ぼくと君は結婚できるのにね」

と答える。

父親について歌ったこの部分は、他のヴァリアントには見られず、歌い手が、母親を歌った歌詞と対応させて父親の部分を即興的に作って挿入したものと考えられる。一般に、この地方の民衆歌謡では、恋愛をめぐる親と子の対立で父親が取り上げられることはほとんどない。そのような歌詞は、人びとの心情に訴えかけるところが少なかったのだろう。そのため、歌い手が母親との対応を考えて意図的に付加したこの部分も、伝承の過程で歌われなくなり、忘れ去られたものと思われる。

ちなみに、ロドピ地方では、桜ん坊の実るのは5月末から6月初旬で、この頃は一年で最初の牧草の一番刈りに忙しい時期でもある。

8. Къде е, севде, майка ти - II

1	йе	*3 л. ед.* = е < съм.
	севде	= севда. 「愛しい人」。 < sevda (T).
2	нема	= няма.
	йе	*мест. 3 л. ед. ж. вин.* = я < тя.
4	мойна	< мояна = моята.
12	не	= ние. 前掲歌12行目の語注を参照。

内容は前掲歌とほぼ同一で、「下手の小さな川」と具体的に場所が示されている点が異なっている。この種の改変は、伝承過程で歌い手が、聞き手に現実感を与えようとして、彼らを取り巻いている景観や状況を歌いこむためにしばしば行われる。

9. Пък мене не е питала

1	Фатмину	*зват.* < Фатмино < Фатмина. 接尾辞 -ина については、вж. Н. Ковачев, Честотно-етимологичен речник на личните имена, Велико Търново, 1995, стр. 14. この接尾辞は、指小、指大の評価を含

		まぬニュートラルな接尾辞で、ここではトルコ語の名前からブルガリア語の形を導き出すために用いられている。さらに、вж. Н. Ковачев, Българска ономастика, София, 1987, стр. 139-140.
	кузум	< kuzum (T). トルコ語は「私の子羊」の意味で、ロドピ方言でもトルコ語同様に、親しい人にたいする呼びかけとして用いられる。срв. БЕР, т. 3.
2	фчера	= вчера.
	вардих	< вардем = вардя. вж. РР, кн. 2. ロドピ方言で「視線で追う、見て探す」。
4	овардих	< овардем / овардвам = увардвам. вж. РР, кн. 2. ロドピ方言で「気づく、見つける」。
6	вашне	< вашине. IV-D-3 歌の 2 行目の語注を参照。
8	кимна	< киман / кимен. вж. РР, кн. 2. 中部ロドピ地方では「悲しげな、しおれた」の意味。この地方の民衆歌謡では кимна, кахърна と同義語を並べて用いるのが一般的。< kin (T). вж. също БЕР, т. 2.
	кахарна	< кахаран = кахърен.
12	чи	= че.

同様のテーマの歌は多いが、ブルガリア・ムスリム女性ファトマとその恋人を主人公としたヴァリアントが、1950 年代後半にトドロフ Т. Тодоров とカウフマン Н. Кауфман によって 4 曲採録されている。そのほとんどは、ダヴィドコヴォ村にも近いスモリャン地方のものである。

НПРК に所載の№ 733 では、

Вчера си имах момаре	昨日、知らない他所の村から
от чуздо село непозанйнно	信頼できないよそ者のお相手と
и чуздо любе неверно.	使者がやってきたの。

許婚者と使者が「他所の村」の者であると強調され、だから晩ご飯も朝ご飯も喉に通らないと歌われる。№ 734 と№ 735 では、どちらの歌でも、娘は母親が勝手に結納を交わしてしまったと嘆くが、№ 735 ではさらに続けて、

— Фатмино, козом Фатмино,	「ねえファトミナ、ファトミナ、
ти торни, Фатмо, със мене,	ぼくと一緒に、ねえファトマ、行って、
а че щем лишен разворна !	それで、結納は返してしまおうよ！」

と、若者は直接行動に打って出ようと娘に訴える。

20 世紀に入って新しい家族観や男女の関係が浸透する以前のロドピ地方では、両親、特に母親が娘や息子の結婚について大きな役割を果たしていたことは、すでに各所で見た。当人たちの意向に反した結婚の取り決めが行われ、彼らがそれを避けようとすると、それまでは駆け落ちという選択肢が非常手段として選ばれることが多かったが、ここでは結納の返却による婚約の解消という手段が取られている。そのどちらも親の決定に背くものではあるが、駆け落ちが、地域共同体の婚姻規範が定める正当性の獲得を犠牲にして当人たちが意思を通そうとする行為であるのに対し、結納を返却し、改めて 2 人の関係を認めてもらうように取り計らおうとする若者の行動は、当人たちの意思と婚姻規範の双方を両立させようとする行為であり、新しい時代の現れであった。

10. Майка те люто кълнеше - I

1	бело	< бяло < бял. вж. НГ, т. 1, 「綺麗な、美しい」。この語は女性にも男性にも用いられて、外面的な美しさを表す。
	копеле	вж. PP, кн. 2. 「若者」。< κοπέλλι. (ModGr).
2	флизе	*аор.* = влезе < вляза.
4	убра	*аор.* = обра < обера / обирам. 「摘む」。
	киткине	< китки < китка. ロドピ方言では、китка は「花束」の他に、「（1 本の茎から生えた）花々」の意味もある。вж. PP, кн. 2.
5	братене	*мн. чл.* < брате = братя < брат.
	та	*мест. 2 л. ед. вин.* = те < ти.
	... та са видели	標準語の語順では .... са те видели となる。ロドピ方言における съм 動詞と代名詞短形を含む文の語順については、вж. ГСМС, стр. 65.
6	та	*съюз.* 「そして、それで」。
	та	*мест. 2 л. ед. вин.* = те < ти.
	майци	*ед. дат.* < майка.
8	йе	= аз.
10	да са не свива	標準語の語形と語順では да не се свива となる。
	са … свива	< свивам се / свия се < свивам / свия. срв. БТР-4. 「突然向きを変える」。ここでは、「（母が娘に向けた呪いが）突然（ハッサンに）向きを変える」の意味。

11	кабахат	вж. БЕР, т. 2. 「罪」。 < kabahat (T).
13	вечеро	вж. РР, т. 2. ‘нощем, вечер.’ 「夜に」。
	гечко	*умал.* < геч. 「遅く」。 < geç (T).
	на	ロドピ方言では動作の目的を表す。標準語では за が用いられる。вж. ГР, стр. 271. さらに НГ, т. 1 を参照。
14	вутерно	срв. РР, кн. 2, ‘вутирно.’「朝に」。
18	кесимли	歌い手の 1 人は、кесимли を хубаво「綺麗に」と説明。< kesimili (T).
	и	*мест. 3 л. мн. вин.* = ги. срв. БДА, т.3, ч. 2, стр. 145-146.
20	Хасанму	< Хасануму. *дат.* < Хасан. この地方では子音に終わる男性の人名や親族名称は、与格語尾 -у を持つ形に人称代名詞男性与格短形由来の -му を付接して、独特な 2 次的与格形が形成される。ここで用いられているのは、前半部の-у が脱落した変則的な形。вж. ГСМС, стр. 21.
	и	< хи = ги. *мест. 3 л. мн. вин.*

ここに掲載したテクストは、次に掲載する 2002 年 3 月 22 日の録音で歌い手 2 人の間に歌詞の相違や混乱が認められたために、同年 8 月 30 日に再度録音したものである。

この歌は、ダヴィドコヴォ村でよく歌われるもので、私たちも調査期間中に数人の歌い手から採録している。現在のところ、ダヴィドコヴォ村以外ではヴァリアントが確認されていない。娘の恋愛と母の干渉といった一般的テーマが歌われているのに、他の地域でヴァリアントが認められないのは、この村で実際にあった事件が念頭に置かれているためかも知れない。同様のテーマの歌が、他の村では別の事件を背景にして作られていると、それらが互いに拮抗して流布しにくいと考えられるからである。ダヴィドコヴォ村在住の幾人かの村びとに尋ねてみたが、この歌の来歴を知る人はいない。

採録歌では、前半部分でハッサンは 2 人称単数の人称代名詞で指示されているが、11 行目以降、ハッサンは 3 人称単数扱いになっている。そのため、前半と後半の整合性がうまく取れていない。前半では、若者が娘に花束を渡そうと彼女の家の菜園で花束を摘んでいたのを彼女の兄弟が見咎めて、母親に告げたことを、娘は軽くなじるような気持ちをこめて若者に伝えているのにたいし、後半部は、母親に対する娘の弁明とも、また信頼できる身近な人への打ち明け話とも聞える。

多くの歌では、若い 2 人の関係が娘の母親の姉妹に知れて母親の叱責を招くことになるが、この歌では兄弟の告げ口がその原因になっている。

IV-D-3 歌でも見たように、若者から娘に花束が手渡されるには、2 人の関係が一定の段階に達していることが前提となる。知り初めの頃に若者から娘に花束が渡されることは、まずない。2 人の関係が、

婚約によってかためられ、村びとたちの注目するところとなって社会的認可を得て、許婚者の若者たちが足しげく出会うようになると、若者は花束を添えた贈り物をするようになるのが、少なくとも 20 世紀の 20 年代までは、一般的であった。

採録テクストでは、娘は水場で若者の求愛に答えて、早朝の菜園で花を摘んで花束を結び、若者に渡している。本来ならこの段階で若者側から婚約の申し込みがあるのだが、母親の怒りから知られるように、若者はまだ娘の両親の認可を得て婚約するまでに至っていない。それなのに、贈り物を手渡そうとした若者に、娘の母親は納得がゆかず、彼に腹を立てているのである。

恋愛や結婚を個人の結びつきとする考えを優先させて当人同士の関係を重視する若者と、社会的な規制の強い旧来の結婚観を良しとする娘の母親との世代的な対立をここに読み取ることも可能で、この歌は新しい社会規範が到来しつつあった時代を反映していると考えられる。

11. Майка те люто кълнеше - II

18	шалваре	= шалвари.「（ムスリム女性の用いる）もんぺ」。 *pl. tantum* で用いられている。
	широки	インフォーマントによれば、この表現は豊かさをも意味するという。ゆったりとしたもんぺを作るには布地がたっぷり必要だからである。
20	учине	*чл. мн.* = очине < око.
	мреноки	< мренок. вж. PPPC, стр. 320. この語は、「直接見ないように細目で」という意味で、ここでは、水場で思いを寄せているハッサンを「直接見ないように細目で」の意味で用いられる、この地方独特の表現。V-A-9 歌でも ам съм чернока, мренока と、女性の魅力を表す一要素の「黒い瞳 чернока」と並べて用いられている。
22	снашкана	< снажкана < снажка < снага.
	тенъчка	*умал.* < тенка = тънка < тънък.
25	кесимли	前掲歌の 18 行目の語注を参照。< kesimli (T).

21 行目で 2 人の歌い手の歌詞がそろわず、1 人は 1 行をとばして歌いかけている。

18 行目から 22 行目までは、娘が自分の魅力を若者に訴えかけているもので、前掲歌や他の採録歌には見られない。また、水場へ向かう時と菜園で花を摘んで花束をつくる時間の設定は、前掲歌とはまったく逆になっている。

12. Майка те люто кълнеше - III

1	Асане	*зват.* < Асан = Хасан.
14	годинка	*умал.* < година.
	стигнеш	< стигна.　срв. НГ, т. 6. ここでは「（年齢や歳月に）達する」の意味。
16	йоще	= още.
	полвинка	= половинка.　ここでは「半年」の意味。

前掲の 2 つの歌とは異なって、母親の呪いの内容が歌われているが、歌は、ここで中断し、娘の弁解ととりなしの部分は歌われていない。

4 行目と 5 行目で съм 動詞の 2 人称単数現在形の си と与格短形 ми の語順が入れ替わっている。ロドピ方言では、自立語が先行する場合、代名詞短形＋съм 動詞現在形の語順を取る [1]。標準語ではその逆で、съм 動詞現在形（但し 3 人称単数現在形 е の場合を除く）＋代名詞短形の語順を取る。歌い手は、ロドピ方言の語順と標準語の語順を混用している。マスメディアと教育の普及により、このような現象は採録歌のあちこちに認められる。

---

1. ГСМС, стр. 56 и ГР, 306.

13. Мене си дава, а пръстен не дава

1	търнал	< търна = тръгна.　срв. **тôрнувам** в РР, кн. 2, ‘тръгвам.’
	тенко Яленко	= тенка Яленко. テクストでは、呼格形 Яленко < Яленка の語末の -о に引かれて、破格的に形容詞は中性形を取っている。ブルガリア語では形容詞の格変化が失われているので、残存している名詞の呼格形とともに用いられる形容詞は、名詞の性に合わせた形が用いられる。срв. НПРК, № 1194. このヴァリアントでは、тьонка Иленко と形容詞は女性形を取っている。
	тенко	< тенък = тънък. вж. НГ, т. 5.
2	ю	< у.
5	зала	*аор.* = залая < залая. 標準語で第 1 変化第 6 類に属する動詞は、ロドピ方言では第 7 類の変化形を取るものがある。вж. ГР, стр. 231-233.

10	сребъран	= сребърен. 形容詞語尾 -ан については、方言解説を参照。
	пърстен	= пръстен. ダヴィドコヴォ村の発音では、標準語で ръ / лъ で表される子音間の流音＋イェル音の結合は、ър / ъл となる。これは、谷を越えて隣接する南の村が、ôр / ôл となり西のスモリャン方言と同じタイプに属するのとは対照的に、ダヴィドコヴォで観察されるこの結合は、北のフヴォイナ Хвойна 方言のタイプに属する。вж. БД, стр. 130 и 134. вж. също РГ, стр. 128-130.
13	дел	= дали. вж. РР, кн. 2.
	дел го не найде	標準語では дали не го найде となり、否定の小詞 не と代名詞短形対格 го の語順が逆になる。
17	йе	*мест. 1 л. ед. имен.* = аз. この代名詞は、西のスモリャン方言と同じタイプで、北のルプチョス方言では йа になる。вж. БД, стр. 134 и РГ, стр. 128-130. それらの下位のダヴィドコヴォ方言は、スモリャン方言からフヴォイナ方言への移行地域に位置するが、全体としてスモリャン方言の要素が多く認められる。срв. ГСМС, стр. 45 и ГР, стр. 182.
22	ям	вж. РР, кн. 2, ‘ама, ами.’
27	поди	*пов.* < подам. вж. РР, кн. 2, ‘ида.’
33	ага	вж. РР, кн. 2, ‘когато.’

エレーナ・ストインとトドル・トドロフによって、1950 年代後半に中部ロドピ地方西部のストイキテ Стойките 村とバルティン Барутин 村でヴァリアントが採録されている[1]。歌詞の内容から判断して、また 1930 年代以前のロドピ民衆歌謡集にヴァリアントが見られないなどの理由からして、比較的新しい歌と考えられる。

私たちの採録した IV-B-9 歌に

Йе съм мома главена,	あたしは許婚者のいる娘、
главена с пърстен сменена.	指輪を交わして婚約した身。

と歌われるように、指輪を交わすことは「婚約」を意味していた。結納の贈り物は、地方や時代や資力によって相違があったが、バジルか柘植の枝を束ねて赤い糸で結んだ花束と指輪が必須のものとされていた[2]。指輪の贈呈・交換は、婚約式の儀礼の一部を構成し、若者の親族と娘の家族の出席のもとに行われた[3]。

しかし、掲載歌では、この手続きが省かれて夜に娘にひそかに会いにきた若者が指輪を手ずから携え

てくるが、犬に吠えられ落としてしまう。後日、娘に尋ねると、肝心の指輪は娘の母親の手に渡り、手放そうとしない。「娘はあげるけど、指輪は渡せないよ」と。両親の介入をなるべく排除して若者同士で結婚の手続きを進めようとしているさなかに起こった出来事を題材にして、コミカルに世相を歌った歌と読むことができるだろう。

---

1. НПРК, № 1194 и № 1195.
2. Соколовци, стр. 311.
3. Попконстантинов-1893, стр. 41-42 и Родопи, стр. 155-159. さらに本項第 3 歌の註解を参照。